## 2-5 合宿およびフォーラムを終えて

### （１）全体の振り返りと今後の展望：共生スポークスパーソン

**振り返りと今後の展望**

**オキーレ 賛**

私がことばを紡ぐプロジェクトを通じて得た最も大きな学びは、困難に向き合うことの重要性についてである。

これまでの 4 度に亘る合宿、また、その間に行われた幾度にも及ぶオンライン・ミーティングなどは、決して楽しいだけではなかった。在日コリアンに対する日本政府及び日本人の加害について学習することは、それ自体が痛ましく、心が締めつけられるような体験であったし、差別の歴史に関して自身がいかに無知であるかを思い知らされた。「共生」や「居場所」といった言葉の定義について考えた際には、それまで他者から「何となくの」、「悪気のない」言葉で傷つけられてきた経験があるにも関わらず、私もそうした聞こえのよい言葉を軽率に使っていることに気付かされた。自身が経験した差別を共有し合う時間においても、可能であるならば忘れてしまいたいその時の情景や感情を鮮明に思い出さなければならなかった。

私には私と同じく「ハーフ」と呼ばれる友人が多くいるが、彼、彼女らがこのようなプロジェクトに従事しているという話は聞いたことがない。私や友人を含む外国にルーツを持つ人間は皆、その内容に違いはあれど、何かしらの差別を経験していると思われる。しかし、そのことを問題視し、解決のために何かしらのアクションを取っている者がどれだけいるだろうか。その数は決して多くないであろう。

行動を起こすというのは簡単なことではない。その目的が「偏見や差別の是正」などであればなおさらだ。私も今回のプロジェクトを通して、差別がどこからともなく自然発生するものではなく、人為的に生み出され、利用され、温存されるものであること、それが社会構造そのものに組み込まれていることを改めて認識した時、「これをどうこうするなど不可能なのではないか。」という諦めにも近い感情を覚えた。しかし、フォーラムを終えた今、それは間違いであると自信を持って言える。フォーラムの参加者からは「ありがとう。すごく勉強になった。外国にルーツを持たない人間(=「純」日本人)こそ、こうした課題について考えていかなければならないと思う。」などのポジティブな感想を多くいただいた。さまざまな困難を乗り越え、自分たちの思いを自分たちの「ことば」で一生懸命紡

いだフォーラムという集大成が、参加者の意識に小さいけれども確かな変化を生み出したことを、そうした「ことば」の数々が証明している。確かに差別は一朝一夕に根絶できるものではない。どうしようもないことは考えず、日々のモヤモヤは笑って受け流し、マジョリティに迎合する方が、相対的に辛い思いをせずに生きられる「賢い」道なのかもしれない。しかし、差別をなかったことにできるのが私たちであるのと同様に、差別をなかったことにさせないのもまた私たちである。であるならば、私は後者の生き方を選びたい。そうすることの価値を、ことばを紡ぐプロジェクトが、共生スポークスパーソンが教えてくれたのだ。

第 4 回合宿 書道作品（たすく作）

## ことばを紡ぐプロジェクト全体を通して学んだこと、今後取り組みたいこと

サラウディン 柳 愛紗

### 背景

私は日本人の母とバングラデシュ人の父を持ち、生まれは日本だが、育ちはバングラデシュであり、年に一度日本にいる祖父に会いに日本に来ていた。大学進学をきっかけに日本に住み始め、現在は社会人としてグローバル人材の就労支援に携わっている。

二つの国、文化、故郷を持っているが、どちらも完全に「故郷」だと感じたことはない。外見がマジョリティと異なるため、多くの憶測を受けることがあった。それらは悪意のある偏見ではなかったが、時にしんどさや孤独感を抱く要因となった。

### 合宿での学びとフォーラムでの経験

社会人として本フォーラムに参加し、学生ではなく社会人の視点で活動を行った。まずは自分自身を理解し、次にメンバーたちを知ることから始めた。メンバーには帰国子女、外国にルーツを持つ学生や私のようなハーフに社会人など、さまざまなバックグラウンドを持つ「共生スポークスパーソン」がいた。

また、歴史や社会構造を学ぶことで、共生に関する問題点が浮き彫りとなった。一つの疑問から始まり、それが「生きづらさ」につながる。それぞれ異なる体験を持ち、社会に対して感じる違和感も異なるが、共通するのは「変えたい」という強い思いであった。

特に、「知らないから分からない、分からないから知らない」という状況に気付いたことは大きな学びだった。自身が「マイクロアグレッション」を受けていたことも、この合宿を通じて自覚した。さらに、墨絵や音楽などを通じた「伝える」形や、日本の合宿ならではのラジオ体操などの文化体験も興味深いものだった。

### 今後の展望

このプロジェクトの大きな成果の一つとして、新しい言葉「共生スポークスパーソン」が生まれたことが挙げられる。フォーラムを通じて行政や教育機関と話し合い、「相手にまず興味を持ってもらうこと」の重要性を認識した。

フォーラムに参加した人々は、すでに「日本の社会を変えたい」「今の社会に違和感を抱いている」という思いを持っている。しかし、多くの人はまだこの課題に関心を持っていないのが現状である。そこで、私ができることは、ここで学んだスキルや知識、経験を発

信し、より多くの人に届けることだ。

フォーラム終了後、私は母校で「居場所～ゼロから始める～ビジネス、リーダーシップ、そして日本におけるバングラデシュ人/日本人女性としての主体的な行動」というテーマで登壇した。外国にルーツを持つ者として、どのように日本でキャリアを積み、スキルを得てきたか、またどのような活動を通じて自分の居場所を見つけたかを語った。そのなかで、このプロジェクトについても紹介した。また、今後は LinkedIn などのビジネス特化型 SNS を活用し、世界最大のプロフェッショナルネットワークを通じて発信を行う予定である。

情報発信に加えて、「居場所」をテーマに、誰もが安心して話せるコミュニティづくりにも取り組んでいきたい。具体的には、外国にルーツを持つ人々の起業サポートを行い、彼らが自らの力で社会に貢献できる環境を整えることを目指す。

第 3 回合宿 書道ワークでの絵(アイシャ作)

## 振り返りと今後の展望

野津貴哉

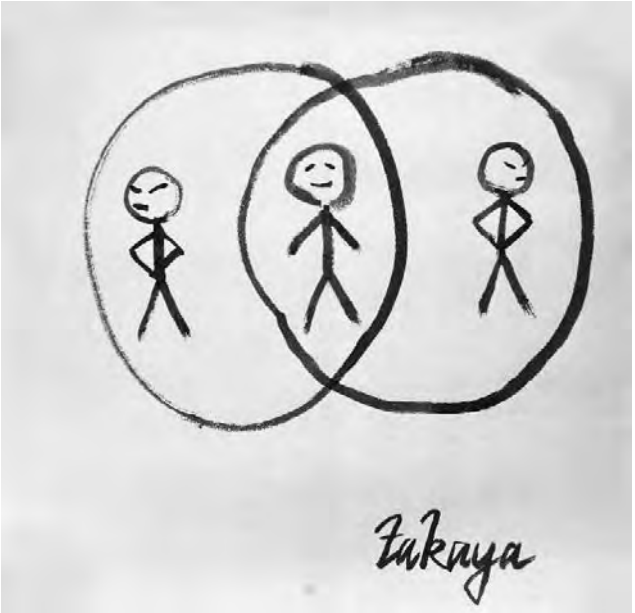
私が合宿を通じて最初に学んだことは日本の在日コリアンが受けてきた差別と権利を獲得した歴史である。私自身は帰国子女であり、この歴史を知ることで日本における差別の見方が変わった。これまでは、日本での生きづらさは自分一人の問題であり、自分の努力不足が原因と捉えていた。しかし、実は日本の社会制度は外国ルーツを持った人を想定してつくられていなかった。私は日本をより住みやすくするためにそれを変革した人々の歴史を知り、とても勇気づけられた。

私は小学3年生の時に帰国し、そのまま小中高と日本の公立学校に通った。しかし、在日コリアンについては授業で一切触れなかった。差別を取り上げる授業でも米国の例だけだ。もちろん、デリケートな話は避けた方がいいという意見もある。しかし、日本の例をより取り上げるべきだと思う。なぜなら、誤解に繋がるからだ。例えば「日本には差別がない」「差別は外国の問題だ」「差別を防ぐために共生に反対しないといけない」などが挙げられる。外国の事例だけ取り上げる授業は却って差別を助長していないか心配だ。というのは、私は合宿の友達から酷い話を聞いたからである。一生懸命練習して挑んだ英語のスピーチコンテストで、審査員に家庭で英語を使っていると疑われたそうだ。理由は名前にカタカナが含まれていたからだ。しかし、その友達は生まれも育ちも日本である。また、ルーツは英語圏ではなく、インドネシアだ。日本国内の差別の事例を無視することは多文化共生＝英語という偏見やさまざまな誤解に繋がると思う。私はこれらを深刻な問題と捉える。

さらに、多文化共生政策や差別教育の多くはマイノリティを固定概念に無理やり当てはめていることを学んだ。合宿中に日本の異文化交流について仲間とよく話した。こういった行事は伝統的な衣装や食事を楽しむことが中心になりがちである。しかし、これは外国人が異質であるという印象を却って強めていないだろうか。例えば、日本人が全員お寿司をつくれる訳ではない。また、フォーラム当日にそう感じさせる経験をした。会場に早く到着しすぎて待っていた時、人種の異なる子どもが何事もないように遊ぶのを見た。その時に「日本人」と「外国人」で分ける癖は社会的に刷り込まれていると再確認させられた。もちろん、文化的な違いは多少存在するだろう。だが、「日本人」や「外国人」のような絶対的な区分として拡大解釈することは防げるはずだ。異文化理解の促進のためには違いだ

けではなく、同じ人間としての共通点を強調する大切さを感じた。

今後やりたいことは考え中だ。しかし、フォーラム当日に私がつくったワードクラウドが好評で嬉しかった。将来も同じように社会問題と IT を組み合わせたことをして社会に貢献できたらいいと思う。




第 3 回合宿 書道ワークでの絵(たかや作)

## 感想と今後の展望

塩田 妙子

運転免許場で起きたことを紹介したいと思う。これは自分に起きたことではなく、近くにいた方の話であるが、日本社会の一部である外国にルーツを持つ者の経験である。

外国の免許から日本の免許に切り替えるために運転免許場を訪れた。免許切り替えの窓口には外国語話者が多く、外国籍の者も多かったと考えられる。つまり、普段その窓口を訪れるのは、外国籍の者や外国語話者が多いと予想できる。ところが、窓口の担当者はコミュニケーションをしづらかった客に対し、無礼で見下すように話し、舌打ちまでした。隣にいた自分まで嫌な思いをしたが、アクションを起こさずにモヤモヤしながら帰った。日本語でコミュニケーションが上手にできないにもかかわらず、外国にルーツを持つ客への担当者の対応は信じられなかった。その客に向けられた対応は日本人に向けられることは到底ないと思う。この時、日本人は外国にルーツを持つ者と同じような違和感を日常的に感じないだろうと思った。

この出来事に似たような経験をしている外国にルーツを持つ者が多い可能性がある。言い換えると、日本人とは違う者の日常は日本人の日常と根本的に違うのではないかと感じている。さらに、日々の苦労だけではなく、日本社会そのものが外国にルーツを持つ者に対して不公正であると学んだ。合宿では、そんな社会を変えるために言葉と対話が重要であることを学び、日本社会の現状を多くの者に伝えたい。そして、外国にルーツを持つ者の目線に立つ考え方が広まってほしいと思うようになった。

今後の日本社会をよりよい方向に変えるもう一歩は、第二回合宿のスピーカーの村松さんがお話ししてくださった「ソーシャルアクション」である。「自分にできることをできる時にやる」という言葉も印象的だ。合宿ではアクションの必要性について議論し合い、運転免許場での経験を踏まえてその時何かしらのアクションを起こさなかった自分を変えたいと感じた。さらに、合宿の皆さんとの会話を通し、決して一人ではないこと、そして、社会に変化を起こすことを望むのは私一人ではないと知った。合宿前の自分は、この出来事は「しょうがない」と思うだけだった。改めて振り返ると、一歩一歩問題解決へ進める事が可能なのではないかと感じる。合宿での学びをもとに活動することが重要だと感じ、

自分を変えながら社会も変える可能性があるということを信じている。

第 4 回合宿　書道作品（たえ作）

## ことばを紡ぐプロジェクト全体を通して学んだこと、今後取り組みたいこと

塚本 南帆

まず、この紡ぐプロジェクトで学んだことは、知ることの大切さである。この合宿にはさまざまな方たちが講師として来られた。現在の多文化共生について取り組まれていること、それに伴う課題や日本における差別問題を歴史的な観点から教わった。多文化共生のために、幅広い分野から、たくさんの人が関わっていることを知ることができた。特に、日本の差別の歴史について学んだ時は、今まで学校で教わらなかったことに疑問を感じたとともに、この合宿で知ることができてよかったと思った。日本での差別を減らすためにも、まずは歴史的な観点から、在日コリアンの人たちが民族教育を受けることができなかったこと、彼らが就職差別を受けてきたことなどの日本の人権に対する負の面も学習し、知ることが重要であると感じた。また合宿では、自分自身の過去を振り返り、経験したことや共生に対する違和感を改めて認識した。自分自身のことを合宿メンバー(共生スポークスパーソン)と共有したことは、合宿を築いていくなかでとても重要な要素になった。自分を知る、共有するという過程のなかで、対話の重要性も学ぶことができた。今まで家族や親しい友人としか話さなかったようなこと、家族や友人とも話したことがないことも、合宿では共生スポークスパーソンに話すことができた。社会に対する不満や違和感を共有し、それぞれが考えることを話す、と言うように、対話が何度も何度も重ねられた。この対話では、自分たち自身が普段感じていた違和感や疑問を口に出すことができた。それがそれぞれの自己理解に繋がり、共有したことによって、お互いに歩み寄ることができた。これが私たちの思う、この合宿が自分たちの居場所となった理由の１つである。そこで私たちは新たな居場所の定義も見つけることができた。1 つ目は、国籍や外見で判断するのではなく、その人がどういう人であるかを見てもらえる場所、2 つ目は、居場所をあげる際によく言われる「安心する」「ほっとする」だけでは終わらない、自分たちで見つけ、同じ目的を持って行動していくことができる能動的な場所であると定義した。この 2 つのことを見つけることができたのは私にとって大きな学びとなった。次に、紡ぐプロジェクトでは合宿だけでなく、フォーラムづくりも自分自身の成長に繋がったと感じている。自分たちが合宿で何を得て、それをどう伝えるのか、言葉１つ１つ慎重に選ばなければならないこと、各々が伝えたい言葉の意味を形成することの難しさをとても感じた。メンバー中には、伝える言葉の内容・意味をフォーラムの直前まで考えている人もいた。その姿に私たちが時間をかけてつくり上げ、言

葉にこだわってきたからこそ、最後まで出し切りたいという意志を感じることができた。ここまで自分たちが言葉を考えて、伝えることができたからこそ、フォーラムの参加者から「言葉に思いが詰まっていた」と言ってもらえ、それが自分の達成感に繋がった。

この合宿の最終的なゴールはフォーラムだったが、私自身が思うこれからやっていきたいことは、この合宿で学んだ「居場所」をつくることである。マイノリティ・マジョリティ関係なく、自分たちの思いを語り合い、それを発信できるような場所をつくりたい。

第 3 回合宿　書道ワークでの絵（なほ作）

## ことばを紡ぐプロジェクト全体を通して学んだこと、今後取り組みたいこと

下村 向日葵

自らの書道作品に込めた思いを語る

ことばを紡ぐプロジェクトを通して私は、怒るだけではいけない、ということを学んだ。私がこのプロジェクトに参加した理由は、教授に勧められたからという理由だけではなく、自分にたくさんの外国ルーツを持った友達や留学生の友達がおり、街で歩いていると「観光客ですか？」などという無知で失礼な質問をされているところを見てきたからである。その度私は若干の怒りと諦めを感じてきたが、今回のプロジェクトで、そう感じているのは自分だけではない、また自分には全く理解できていなかった、生きづらさを抱えている人がいると知り、より一層共生について考えるようになった。特に、このプロジェクトの仲間である共生スポークスパーソンのみんなとお互いに自己開示をしていくことで、私が今まで見ることができていなかった現実を知ることができ、同じ日本に住む若者として、憤りを覚えた。

しかし、4 回の合宿を重ね、さまざまな職種の人と出会い、さらにフォーラムで役所や学校で働く人とのディスカッションを通して、社会に向かって怒るだけでは足りないのかもしれない、と感じるようになった。私たちは、生きているなかで感じる不快感を共有し、フォーラムでも発表した。例えば、「日本語上手ですね」と言われたり、見た目によって国籍を確認されたりなどである。しかし、フォーラムの最後のディスカッションで、現在の行政、教育現場で足りないことを話し合った時、私の期待していた、知識や想像力という言葉よりも先に、「予算」という声が上がった。行政・教育関係者にも、共生のためにやりたいことはたくさんあるが、予算が足りなくてできないことばかりであるというのである。私はそれを聞いてまずは怒りが込み上げたが、それと同時にやはり予算などの数字の問題は、現実的に考えたときに無視できないとも感じた。もちろん、だからと言って私たちがプロジェクトを通して積み上げてきた社会に必要な価値観を曲げたりはしない。しかし私はこれを聞いて、私たちも怒っているばかりではどうにもならないのではないか、とも感じたのである。

つまり、私がフォーラムで学んだことは、単に犠牲者のままで怒ったり、偽善者のふりで正論を言うばかりでいるのではなく、本当の居場所をつくるにはどうすればいいのかを常に模索することである。このプロジェクトを通して、私たちは半年間でやっと私たちなりの居場所の定義をつくり上げた。そしてその中には「能動的に集まる」という言葉が入っている。それは、ただ反応的になって批判ばかりするのではない、という意味合いがこもっているのではないかと私は考えている。

これを踏まえて私はこれから、能動的な居場所づくりを模索していきたいと考える。特に自分自身は日本がルーツであり、逃げることもできる人間であるからこそ、能動的に求め続けることが重要なのではないかと思う。具体的にはわからないが、多文化フェスティバルの伝統衣装や食文化だけでは足りない、芯の部分が癒されるような居場所を創り、それを広げていけるような行動をしたいと思う。

第 4 回合宿　トナカイになったひまとなほ

## ことばを紡ぐプロジェクトで得た学びと今後の目標

曽祢 メラティ

私はインターン兼メンバーという立場でことばを紡ぐプロジェクトに参加した。日本とインドネシアにルーツを持つハーフとして日本で過ごすなかで、「外国にルーツを持つ」自分と「日本社会」の間に多少の違和感や生きづらさを感じる節はあったものの、ことばを紡ぐプロジェクトに参加するまではそれについて深く考えたり誰かと話し合ったりすることはなく、日々経験する小さなモヤモヤが自分の中だけで積み重なる状態が続いていた。このモヤモヤは必ずしも意図的に放っておいたという訳ではなく、自分が置かれている状況は仕方がないことであるという思い込みや、モヤモヤについて周りに話しても理解してもらえない、又は真面目ぶっていると思われるかもしれないという懸念が、問題の根本解決から私を遠ざけた。

大学生になり、より広い世界で多くの人と関わるなかで、見た目や名前を理由とするよそ者扱いを経験する場面が増え、「私は日本社会の一員として認められていない」と感じるようになった。また、ボランティアで、外国にルーツを持つ子どもたちや非正規移民・難民が日本社会で直面するさまざまな困難を実践的に学び、現在の排他的な日本社会では「外国人」だからという理由で未来や権利を簡単に奪われている人々がいることや、最悪の場合、命を奪われる人もいることを知った。外国にルールを持つ住民を含めたあらゆるマイノリティが日本社会の一員として心地よく暮らせる社会を一刻も早く築く必要があると考えていたところ、KFC からお誘いいただき、プロジェクトに参加することとなった。

プロジェクト参加を通して最も印象的だったのは、自分を受け止め、理解してくれる人や環境に感じた居心地のよさである。さまざまなバックグラウンドを持つメンバーと共に共生について語り合うなかで、否定や批判を心配することなく率直な思いや疑問を交わせた時間は、希望として私の心の中に残り続けている。自分と同じようにモヤモヤを感じてきた仲間がいることや、「共生の実現」という同じ目標を持って日々を過ごす同世代とつながりを持てたことは、それまで私が持っていた孤独感を明るい未来への希望に変えてくれた。また、合宿で学んだ在日コリアンの歴史や日本に住む「外国人」が制度によって排除されてきた歴史、それに対抗するための市民による社会運動の歴史は、社会問題解決のために過去を振り返る必要性を再認識させてくれた。問題の根源となる差別的な制度や概念は、それを形成してきた歴史的プロセスや過去の過ちを振り返らずして改革することは難しい。世間一般に隠されてきた歴史や伝えられなかった歴史はマイノリティに対する抑圧

の象徴であり、そういった歴史ほど積極的に学ぶ必要性があると強く感じた。

このプロジェクトを終え、今後私が目標としたいのは「多文化共生」問題の「当事者」とされる外国にルーツを持つ人々に対する差別的な制度や言動、それを助長し得る取り組みや発言に対し、社会全体が「おかしい」と思える環境をつくることだ。最終的な理想は、そういった制度や言動自体がなくなることであるが、まずは今日の日本社会で当たり前に受け入れられている「外国人」差別をなくす必要があると考える。これを実現するには、「当事者」の声が社会制度や地域の取り組みに反映されるシステムや、国籍やルーツの垣根を超えた市民の地域交流が不可欠である。投票や署名活動、イベント参加など、共生スポークスパーソンとして能動的に「当事者」の声を届ける努力をしていきたい。また、同世代や外国にルーツを持つ住民と共生についてもっとカジュアルに語り合える場もつくってみたい。一人で悩みを抱える「当事者」や社会問題への関心が高い若者(もちろん若者以外も)が安心して語り合える「居場所」の構築は、マイノリティに包括的な社会を築く大きな一歩になると願っている。

第 3 回合宿 書道ワークでの絵(メラティ作)

## 合宿を通して学んだこと、今後取り組みたいこと

清水 フェリペ 隆志

合宿では、外国にルーツのある者と日本の「多文化共生」に対する疑問点を持つ者たちが集まった。そこでは、「多文化共生」とは何かについて、自らのルーツの話や経験を交えながら話し合った。合宿の回数を重ね、話し合うなかで、自分が持っていた考えが大きく変わっていく。そのなかで私たちの思いを発信するために「共生スポークスパーソン」が結成された。ここでは、合宿を通して学んだことを合宿に参加する前の考えと比較しながら述べていく。そして、今後取り組んでいきたいことを述べていく。

合宿の参加前は、大学の授業の一環で、KFC(神戸外国人支援センター)で学習支援を行っていた。学習支援を重ねていくなかで、学習支援の仕方を試行錯誤ばかりしていた。子どもたちのルーツを知ることはあったが、その子は何が好きで、何が嫌いか、その子自身にフォーカスすることはなかった。学習支援の振り返りには、「支援に苦労した。」「子どもが勉強に集中しないから対立することがあった。」「次は違うやり方で支援を行う。」などと記載し、子どもたちの本音、本心の部分を汲み取らずに過ごしていた。ただ、自分が同じ外国にルーツがあるからという理由で、子どもたちの学習支援がうまくいくと、勘違いしていた。この勘違いは、合宿に参加しないと気付くことが出来なかった。この勘違いの気付きは私にとってとても大きな学びとなった。もう一つ気付いたことがある。それは、外国につながる子どもたちにフォーカスした考えを持てなかったことである。合宿前の私は、自分の持っている外国ルーツの大切さを認識しておらず、子どもたちの学習支援の方法ばかりを考えていた。この考えがあったからこそ、合宿を通して大きな学びを得ることにつながった。合宿では、自分のルーツを大切にし、尊重されており、一つ一つの意見ができる限り多く取り入れる姿勢が感じられた。さらに、ほんとの意味での外国にルーツを持つとはどういうことかの理解するための学びや、外国人と呼ばれるようになった歴史の学び。これらの学びを得たことで、世の中に対する疑問点を持つことが出来るようになった。ほかにも、私たちが持つ外国ルーツの大切さを知るための自分たちの主張の場が設けられたり、「多文化共生」に対する疑問点についての話し合いが行われたりした。このような合宿で行われたプログラムは、「共生スポークスパーソン」が生まれ、活動してきたからこそ、とても価値のあるものとなった。

合宿を終えてから、大学の先生と話す機会があった。そこで合宿について振り返ったと

き、話し合いのなかで環境が大事であると出た。このなかである疑問が出た。この日本という環境のなかで、なぜ日本人らしくあらないといけないのか。また、なぜ私が周りと違うように扱われたり、学校の先生から丁寧に教えられたりすることの蟠り。私の外国にルーツがある子どもとしての生活経験がのどに引っかかるのはなぜか。これからの時代は、この疑問の答えが求められる。しかし、これには答えがない。そこで先生は「答えがないものを探すことにとても価値がある」と伝えてくれた。この言葉に今までの合宿が凝縮されたように感じた。答えが出なくてもよい。迷うことが出来ることが大事。この迷いも合宿がなければ学ぶことが出来なかったと思う。

今後取り組みたいことは、ブラジルにルーツのある小学校教員になることである。ただなるだけではない。日本で最もブラジル人の多い静岡県で先生になることである。私は今まで、恵まれた環境で育ってきた。周りには知り合いのブラジル人、全校生の少ない学校生活。優しい隣人など。これらの恵まれた環境を、学校という場や近所のコミュニティを使って、自らつくっていきたい。日本で苦しんでいる外国にルーツを持つ子どもたちを受け入れ、語学支援をしたり、文化の交流をしたりなど、恵まれた環境を子どもたちと一緒につくっていきたい。また、保護者も日本で生活する上で困ったことがあれば助けるようにしたい。

助けるために、今年中にしておきたいことがある。それは、ポルトガル語検定、英検を取得するである。外国にルーツはあっても言語が日常会話レベルではいけない。資格を得ることで、具体的な支援、援助、また、さりげない会話。この言語的な部分が、日本においてとても貴重となる。外国にルーツを持つ人たちの信頼を得ることにもつながる。小学校教員の観点から見ると、多言語で話せることは、保護者や子どもたちにとって安心できることにもなる。

最後に、私は恵まれてきた。だから今度は、子どもたちに恵みを与える側になりたい。日本で過ごす最近のブラジル人の子どもたちは、夢がないと聞いた。そのため、私は現場に行き、夢を与えられる存在となりたい。できることはちっぽけなことかもしれない。しかし、子どもたちの人生において大きなきっかけとなればよいと思う。少しでも「あの時にあの人の言葉があったから」と思ってもらえればよい。

今からの人生、「ブラジルのルーツ」を持つ清水フェリペ隆志として。自信を持ち、生きて、道を切り開いていく。

## （２）ことばを紡ぐということ ： コーディネーター櫻木晴日

いまだから言えることだが、「ことばを紡ぐプロジェクト」は成功するのか。成功うんぬんの前に、そもそも成立するのか。そんな不安を抱えながら走り始めた１年だった。だが、私たちの思いをつないでくれた森さんや岩品さん、そして参加メンバー、インターンのメラティさん、先生方、いろんな方に支えられ鼓舞してもらい走り切ることができた。そして、この事業は成功を収めたと思う。何を達成し、どのような課題が残されたのか、書いておきたい。

先に書いたとおり、セルフサポーターの育成は当事者性の認識を基底に、心の音叉と行動力を解放していくことがポイントではないかという仮定からスタートした。

当事者性について、プロジェクトは外国ルーツの若者と外国にルーツをもたない日本の若者を対象にした。外国ルーツの若者の中には、「日本人らしくならないといけない」という抑圧のなかで当事者性を認識していなかった(できなかった)と語る者もいたし、これまでの困難はルーツに起因するものではなく自分の努力不足で個人の課題だと思いこむ者もいた。私の体感だが、日本人にとっては「ルーツはどこですか?」や、「過去を振り返ってみましょう」、「自分のアイデンティティは?」という問いかけは、返答に迷うものであった。自分は当事者ではないがどこに腰を落ち着けたらいいのだろうかというある種の居心地の悪い感覚があったのではないかと思う。

國分・熊谷(2020)は、当事者研究とは社会を「変える」に先立ち、類似した経験を持つ仲間と共に、自分たちが何者なのかについて「知る」を志向した活動だと述べる。なぜ、集まったメンバーたちは社会の変化を望むのか。合宿初日には、自分を「知る」活動を行った。自分たちは違和感やモヤモヤを持つ「当事者」であり、その原因は必ずしも個人に帰せられるわけではないことを確認する作業であった。これは、あとに続く学びや対話に先立つ重要なステップになった。

心の音叉について、音叉の振動を阻むものは何か。自己責任観、諦め、強者であるという自己認識、自分のことで精いっぱい。いろいろな無意識の感覚が心の揺れを抑制している。その背景に共通しているのは、心を震わすことはしんどいということだろう。震えてしまったときにどうすればいいかわからない。それがどこかで分かっているから、音叉を解放する準備ができていない。その意味で、本プロジェクトに関心を持つ若者は、音叉が震えている人、震えそうになっている人だったと思う。合宿を重ね、講師の方々のお話を伺うなかで、皆の音叉が共鳴し合う場面に立ち会えたことはとても幸せなことだった。一方、応募者のなかには「聞いてあげたい」「変えてあげたい」という目線が垣間見られる動機を持つ人もいた。そうした人こそ、ここでいう当事者性に気付く過程が必要だったと思

うが、この課題は今後に繰り越したい。

もう一つ、行動力については、プロジェクトが終わったばかりで断言することができない。新しい活動のめども立っていない。だが、共生スポークスパーソンたちが一つのフォーラムをつくりあげたことは、少なくとも「自分たちがつくりだすことができる」自信になっているはずだ。印象的なのが、フォーラム準備のミーティングでのあるメンバーの言葉だ。「ここまで自分たちでやってきた。大人が決めたんじゃない。だから最後まで自分たちがやりたい」という旨の内容だった。どこかの大人に言われてやっているのではない、自分たちが一から決めているんだという強い思いがにじみ出る。そんな主体性を感じてくれていることが嬉しかった。

また、私に再考を促す言葉を紡いでくれた人もいた。「大きなわかりやすい行動だけが行動ではない。半径 30 ㎝でできることも社会を変える行動だ。」という言葉だ。例えば、スマートフォンでマイノリティの権利についての記事を見つけたら、自分も発信する。身近な人と話してみる。大きな活動以外にもできることはある。

以上のように振り返ると、個人的に勝手に描いていた粗い絵であったが、共生スポークスパーソンたちは自分たちの力で学びをつかみ取ってくれた。マジョリティ側の実情も理解するという厄介な課題に対しても、批判するだけではなく一緒につくる必要性、組織の中にあって無力感を抱える個人の存在、歴史を学ぶ機会を奪われているなどの課題を挙げてくれた。マイノリティとマジョリティ、双方の現実を理解する最初の一歩を踏み出せた。

こうした成果を感じる一方、メンバーが表現してくれたしんどさや違和感には既視感を覚える人もいるのではないか。在日コリアン、障害者運動、公害で苦しんだ方、女性、性的マイノリティ。マイノリティが立ち上がり、これまで世界にむかって紡いできてくれた言葉を、私たちの社会はまだ発しさせている。社会の感度がどれだけ低いのかということに唖然とした期間でもあった。

マイノリティに同じ苦しみを背負わせないためにも、本事業のような「学ぶ場」が色んな場所にできたらいい。そこで、なぜ以上の成果が出せたのかということを考えたい。私は、2 点あると思う。それは、色んな人が「居心地の悪さを越えて」、「降りて来てくれた」ことにある。

「居心地の悪さ」は上でも少し触れたが、ここではマジョリティとマイノリティが分け隔てなく交じり合えた。マイノリティの声が聞かれないマジョリティの場、マイノリティに語らせるマジョリティの場、逆にマイノリティだけの集まり、ピアグループなどは社会に多く見られる。そこでは、マイノリティの隠蔽や「かわいそうであることを訴えないといけない(第 2 回合宿)」存在にさせられる。マジョリティによるマイノリティの「弱さ」の再認識でもなく、マイノリティ性の強さを求められる場でもなく、マジョリティが「わ

からないでしょ」と言われる場でもない。だがその分、一人ひとりが自分の思いを大事にしながらも相手の思いも大事にしなければならない。それは、決して居心地がいいだけの場ではない(成果報告会)。だが、居心地の悪さを居心地のよい場所に変えていけることを、共生スポークスパーソンたちが証明してくれた。

そして、もう一つはそれを支える人たちの視線である。このプロジェクトに関わってくださった方、講師をはじめ事務手続きなどで助けていただいた方と出会う度、なんと寛大な方たちなのだろうと驚きと感謝の気持ちが沸き上がってきた。経験をより積んでいる方が、若者たちから学ばせてほしい、話を聞かせてほしいと寄り添ってくださった。大学の先生、行政の方、専門家は、若者にとってはとても距離が遠く、権力を持つ人、近寄りがたい人という感覚がある。だが、今回はその方々が私たちの方に「降りてきてくれた」。こんな上下関係を表す言葉は講師にとっても、メンバーにとっても心外だと思う。でもどうしても権力性は存在する。その権力性を越えてきてくださり、メンバーもそれに対し卑屈にならなかった。お互いが学ぼうとしあった結果だと思う。KFC がこだわる「共育」とは、こうした過程なのだろうと、今回初めて身を持って感じることができた。

課題として、プロジェクト実施前の打合せで指摘されたように、常にこぼれ落としてしまう人がいるという点である。今回であれば、在留資格がない若者など生活の維持自体が危険にさらされている人びとと共に歩むことができなかった。自分たちもどこかの面で権力的に考えているのかもしれないという視点。この反省を忘れないことも肝に銘じたい。

改めて、本務がある中、寝る時間を削って力を貸してくださった講師の方々と、最後まで一緒に走ってくれたメンバーたち、ひま、アイシャ、たえ、なほ、フェリペ、たかやに感謝したい。メラティさんには 1 年間、たくさん時間も力も割いてもらい、たすくさんは途中からの参加だったが報告書づくりまで頑張ってくれた。そして、私たちの挑戦をいつも温かく見守り、やってみたらいいといつも背中を押してくださる理事長と志岐さんにも心からたくさん感謝を伝えたい。

共生スポークスパーソンたちのあゆみはここから始まる。私も社会を変える仲間と共に、「即戦力育成」論に負けず、共生社会に必要な「学び合う」場という社会資源を増やせるよう励みたい。

國分功一郎、熊谷晋一郎 2020『〈責任〉の生成』新曜社.

## （３）「言葉を紡ぐプロジェクト」まとめに代えて：講師の方々より

### 共生スポークスパーソンへのエール

**孫 片田 晶**

私は、ことばを紡ぐプロジェクトの夏の合宿で、皆さんが多文化共生トカナントカいうことについて、この社会にいまどんな問題があり、ここからどうなっていくべきと思うかを話し合う場に同席させてもらいました。これまで体験してきたことや問題意識を聞かせてもらったこと、忘れません。一人ひとりが自分の経験や考えを言葉にして、ほかのメンバーと本当に交流しようとしているのを見て、この人たちなんかいいなあ！やるなあ！と思いました。そしてお酒とジュースで夜遅くまでだべる！(そこがさすが KFC！ってコトデスヨネ！)

立場性も移動の体験や文化背景もそれぞれ違うのだから、簡単なことではなかったと思います。ある人が、高校時代のことを、何かに向き合って考えようとすることに冷笑的な周囲の圧力に同調して自分を変えたくはなかった、別の場所を求めていたと言っていたのも印象的でした。

その後の神戸での発表の場などで、このプロジェクトで在日朝鮮人の歴史のことを学んで、反差別のファイティングスピリットのようなものを感じて嬉しかったという言葉や、今の自分たちが出会っている問題との連続性を考えたという発言を聞いて、私ももっとまじめに仕事しよう～という気持ちになりました。ありがとう。

私が勤める立命館大学で少し前に、ある移民ルーツの学生が大学の現状について問題提起してくれたのをきっかけに、学生・教職員の小さなグループができました。先週、そのDir というグループのワークショップ「大学におけるナニジン？的多様性の包摂と排除について考える」にメラティさん、貴哉さん、南帆さんに来てもらえて、とても嬉しかったです。3 人の言葉を、さまざまな思いを持って集まっていた人たちに聞いてもらえました。大学の DE&I トカナントカでは、フェミニズムの長い歩みが築いてきたものがあり、最近は LGBTQ＋のこともすごいなと思うことがありますが、〈日本人が思う日本人〉ではない存在のことはまだまだこれからです。ことばを紡ぐプロジェクトの皆さんの素敵なところは、一緒に考えられる場所、セーフスペースと呼べる場所を自分たちでつくったところだと思います。自分がいいと思う集まり。学ぶことができ行動が始まる場所。そういう素敵な場所を経て、それぞれの仕事で活躍しつつ、日常をマイペースに元気にやっていく皆さんが想像でき、同じ社会にいる者としてなにか心強いです。それぞれの進路にきっとたくさんのよい出会いが待っていると思います。

（第 2 回合宿「外国人『問題』はどうつくられてきたのか?」講師）

**スペイン語通訳相談員・社会福祉士　村松 紀子**

私が皆さんと同じくらいの時、JICA 青年海外協力隊で南米のパラグアイに派遣された。(写真)任地は南部の農業移民の多いところで、複言語主義(plurilingualism)・複文化主義(pluriculturalism)が当たり前の環境だった。個人の中に複数の言語と複数の文化が存在し、ひとつに決めてしまわないで、お互いを許容していく。私は、日系移住地ではお風呂にはいり、ドイツ系のホームステイ先ではドイツ料理を食べ、村の女性たちとグアラニー語で挨拶し、職場ではスペイン語で会議をした。そこは、自分のアイデンティティを生活のなかで継承する自由と同時に、共通語としてのスペインで理解し合うことが当たり前の社会だった。ほとんどの人がふたつ以上の言語と文化を持っていた。だから、日本の中の「同調圧力」が息苦しくて、半分海外逃亡のような形ででていった私にも、心地よく溶け込むことができた。

帰国してからは、入管法改正で来日した南米の人たちと話をすることが仕事になった。学校の英語の授業は大嫌いだったけれど、南米の人たちが好きだからスペイン語で直接話ができることが本当に楽しかった。海を越えてきたたくましい彼らから、日本社会を見ると違う風景が見えてくることも教わった。マイノリティであることを意識的に捉えることのできる人は、人と違う人生を歩むことで、人とは違う窓を通して社会を見る能力が備わると思う。

世の中に言葉が溢れている。いかにも CHAT　GPT が書きそうな、どこへ出しても及第点の言葉。それらの言葉は社会のなかで、毎日のように右から左へ消費されていく。でも、そんな言葉をいくら大量に受け取っても、人の心は容易に動かないことも、私たちは知っている。月並みだけれど、こんな時代だからこそ「言葉の力」を信じたい。暴力を容認するのではなく、一人一人は違うから、意識的にきちんと言葉で伝える努力をすることを大切にしたい。あなたの今日の「言葉」が、今度は誰かの支えになれると信じている。

(第 2 回合宿「分野を横断した現場の話から共生にむけた課題を知り変化の方法を考える」講師)

**神戸市地域協働局地域協働課　中村 歌奈子**

「ことば」は、口にした瞬間から力を持つといわれてきました。よいことを言えばよいことが、悪いことを言えば悪いことが本当になる。これを「言霊(ことだま)」というのです。だから「ことば」にするときには、その「ことば」が届く相手のことまで考えなさい。私が小学校 3 年生のとき、担任の先生がそんな風におしえてくれた。

多様な背景を持つ若者たちが、自らが抱える混沌とする想いを「ことば」にして、叶えていきたい未来の姿として紡いでいく。そうすることで、各々が少し強くなり、社会を変えていこうと手をつなぎ向かっていく。困難を幾度も乗り越え、今も密やかに粘り強く立ち向かい続ける人たちが、若者たちを見守り、エールを送る。

このプロジェクトの全ての「ことば」が、幸せを願う「言霊」となって、世界を変えていく力となろうとしている。

勇気を持って立ち向かう人たちのそばに寄り添うこと、それが私にできる精一杯かも知れないけれど、この国・このまちで共に生きていきたいと願い、応援し続けると、私も「言霊」に込めて届けよう。

(第 3 回合宿ワーク③「多文化共生施策の立案から実現まで」講師)

第 3 回合宿 2 日目に集ってくださった方々

**森 ちぇろ**

9月にしあわせの村で行われた「深める」合宿にお招きいただき、「企画の立てかた」ワークショップを担当させていただきました。ワークショップの前に、参加者の皆さんの作文を読ませていただきました。皆さんの考え、悩み、思いが詰まっていて、それらを企画に結びつけるために、どんなワークショップにしたらよいか考えたのですが、ワークショップでは特に私が経験してきた企画書の書きかたをお伝えする形に止まってしまったかなと思います。短時間で皆さんに企画をつくっていただいたのですが、短い時間で思いと企画を結びつけたので、皆さんかなり悩まれたかなと思います。

思いを企画にするには、何を達成したいか、そのために何をしなければならないかなど、準備をすることがもちろんあります。テクニックとして押さえるところを押さえれば企画は作れると思います。ただ、「思い」が欠けていると、人に伝え、共感を得て、企画を前に進める力に欠けてしまうのではないか、と思います。参加者の皆さんは、ことばを紡ぐプロジェクトを通じて、「思い」の部分を大事にし、何を伝えたいか、伝えられるのか、深く思い悩んでこられたと思いますし、これからも思い悩み続けるのではないかと思います。この「深い思い・深い悩み」は、人との差異を感じてしまったり、社会で生きているなかで感じる違和感がある限り、ずっと続くものだと思います。「思い」を「企画」にすることは、自分が「思い」の中に入りこんでいる場合には、ある意味で自分を曝け出すことでもあって、恐怖も感じるかもしれません。「企画」を立てるわけでなくとも、それ以前に、自分が何者だということを考えていたら、自分が何者かということについて人前に出て話すことは、時と場合によってはとても恐ろしいことです。参加者の皆さんは、もう乗り越えているかもしれませんが、私自身はこの「恐怖」は一生付き纏うものだと思っています。プロジェクトに参加した皆さんは、この「恐怖」を一緒に乗り越える、あるいは恐怖を感じていなかったとしても、「思い」の実現に向けて共に歩む仲間となったでしょう。「思い」を「ことば」に変え、もっとたくさんの仲間が増えて、私たちの歩く道が明るくなっていく。1人1人が背負うには重すぎるけれど、プロジェクトを通じて、「ことば」がたくさんの方に届くことを信じています。

(第3回合宿「思いを実現するための企画の立て方」講師)

## 当事者／支援者の二項対立超えていく共生スポークスパーソン

加藤 丈太郎

### 書きことばで相手に情報を伝える

筆者は「ことばを紡ぐプロジェクト」における最初(2024 年 8 月)と最後(2024 年 12 月)の合宿に参加した。最後の合宿では、報告書の書き方に関するワークショップの講師を依頼された。参加者たちが話しことばだけでなく、書きことばでより効果的に発信をできるようになってほしいとの思いから講師を引き受けた。

誰かに何かを理解してもらいたいときに、話しことばと書きことばでは、表現できる幅に明らかに違いが存在する。たとえば、話すときに、ヒトは無意識に、表情やジェスチャーを用いているだろう。しかし、これらは書くときには使えない。また、話すときには言い直しやつけ足しも可能である。しかし、書きことばでは、書かれている内容の解釈は全て読み手に委ねられている。書きことばで、自らの意思を明確に伝えるためには、誤解を招かない明確な表現・論理が必要となる。ワークショップでは、参加者に自らが伝えたい内容をその場で記してもらい、相互にレビューを行うことで、相手に内容が伝わっているのか、伝わっていなければ、どこを修正すれば伝わるのかを体感してもらった。

このワークショップを引き受けて、本当によかった。なぜなら、ワークショップ中に、参加者たちが「共生スポークスパーソン」と自らを表している光景に触れることができたからだ。参加者たちに、成長と可能性を感じた。

### 共生スポークスパーソンの意義

「多文化共生」とは総務省(2006)の定義によれば、「国籍や文化の異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」とある。しかし、移民(外国人)支援においては、時に当事者を支援者が「支援してあげる」という「縦の関係」になっている場合もあるのではないか。筆者はこの縦の関係を対等な横の関係に変える重要性を訴え続けてきたが、何かさらなる妙案はないかと考えてきた。

「ことばを紡ぐプロジェクト」には、外国籍／日本籍、ダブル(ミックスルーツ)、ルーツを有する国もさまざまな参加者が集まった。参加者たちは、自らが「境界」を超える経験をしながら、日本社会で成長してきた。そして自らを「共生スポークスパーソン」と表すようになった。このように、当事者／支援者という二項対立を超えた「共生スポークスパーソン」こそが、横の関係をつくっていけるのではないか。

**共生スポークスパーソンを育める社会に向けて**

「共生スポークスパーソン」は若手社会人、もしくはこれから社会に出ていく年齢層である。ぜひ横の関係をつくる現場の第一線で活躍してほしいが、それを仕事で実現するのはまだ難しい状況にある。この状況を上の世代はいかに変えることができるだろうか。たとえば、共生スポークスパーソンの一人は、学校教員になることを目指し、自らが有するブラジルへのルーツを武器に、ブラジル人が多い地域での就職を考えている。このような意欲を受け止められるような日本社会にするために、筆者も発信を続けていきたい。

（第 1 回合宿および第 4 回合宿「報告書作成に向けて」講師）

第 4 回合宿 加藤先生のワークの様子

**ラボルテ 雅樹**

私はそろそろ世間でいう「若者」カテゴリーから外れる人間だ。

根っこはそれなりにやさぐれている。それなりの年数の賃労働を経て、(私自身の過去と相対化して)まるくなったと思うが、やはり、やさぐれている。今から 10 年以上前の、私が 20 代前半だったころの例を挙げよう。

私は「わたしは不器用だ」と「不器用でもいいじゃないか」というのが口癖だった。ようやく就いた仕事を、私は数か月でやめた。上司に慰留され、退職事由を問われた返答が「組織がファシズムっぽい」だった。退職事由として、組織のファシズム的性質を述べた年間件数を、私は知らないが、きわめて少数だろう。続けていればよかったのに、不器用である。

いまはどうだろう。私は経済社会生活のルーティンのなかで、めっきり、「不器用」という言葉をいつの間にか、使わなくなってしまった。どこかしらの面従腹背を思いつつ、ある種、(はたから見たら、どこかはみ出ていだろうけれど)賃金労働者ができてしまっている。

前置きが長くなった。

「素直にうれしかった」のが、ことばを紡ぐプロジェクトに関わる、それぞれの人との短い期間での、対話の感想だ。これまでの生育歴をはじめ、いろんな背景も関心軸ももちろん私と異なる。けれど、言葉を紡ぐところ、言葉がでてこない「間」の感覚や、マイクロアグレッションや同調圧力をはじめ、引き受けている負荷の経験から見える原風景は、内心「そう、その感じなんだよ」と、私がひとりでないことを、改めて感じさせてくれた。

自身の経験した範囲のなかで収斂するのもひとつだと思う一方、メンバー自身が引き受けざるを得なかった経験から先の、社会科学的学びや自らと異なる他者との出会い、実際の取り組みを通して、この社会で主体的に生きようとする姿が、私自身も諦めてはいけないことを、思い出せていただいた。

私は「講師」として呼ばれたが、そうした感覚を、日常のために、失いつつあった。矛盾するが、生きること、生き続けることから始め続けることであってもいいと思う。私は失いつつあった感覚を思い出せていただいたが、同時に私は、私の日常のための惰性や限界を許したい。

生きることは、社会と歴史の変化を否応なく、引き受けざるをえないことでもある。あなたも、私も、弱く、脆く、不器用な人間だからこそ、「共に」が大事なのだ。

再会する／せずとも、生き続けることを起点に、ゆるやかな連帯を紡いでいきたい。

(第 3 回合宿「今の社会、私たちに必要な社会資源」および最終フォーラム講師)

## コラム

**今井 貴代子**

この社会は等しく声を聞いているだろうか。マイノリティ、弱者、小さな声の存在は非対称な関係性がゆえに、その声が等しく聞かれることなく周縁化される。マイノリティの権利獲得運動はそれらに抗い声をあげて社会の不正義を訴えてきた。障害者当事者であり、障害者運動と動物の権利運動の担い手として知られるスナウラ・テイラーの言葉を借りれば、声がないのではなく、聞くに値しないとされた声があるのである。どうすれば声は聞かれうるのだろうか。このプロジェクトはそうした問いに応えようとしているようにも思える。

参加者とは夏の合宿で初めて出会い、次に会ったのはオンラインで視聴した成果報告会だった。参加者が自身の変化を語るなかで印象的だったのは、これまでのモヤモヤした経験や被差別の体験、葛藤、孤立、痛みなどが、合宿を通じて一人ではないと気付き言語化され、社会や制度、歴史のなかに位置づけ直され考えられていたこと、そして、それが可能になったのはメンバーとの対話＝居場所が生まれたからだと語られたことである。半年間に経験したことが非常に大きなものであったことが想像された。他者と出会う場、異なる声を聞き合う場が社会に多くないことが改めてわかり、だからこそ参加者がこの学び合いを通じてエンパワメントされているのが伝わってきた。

ただし、そうした場は単に居心地がよいだけではない。参加者の発した次の言葉も心に残っている。「プロジェクトはしんどいが、やめたいとは思わない。意義があると思っているから。新しい価値を生み出せていると思える。かかわると傷つき合うが、でもそうしないと価値は生まれない」。他者と出会うこと、異なる声を聞き合うことは、価値観が揺さぶられ、変容していくことでもある。私の経験を振り返っても「しんどい」ことは少なくない。むしろ多いかもしれない。参加者たちがその先の「新しい価値」に意義を見出していることに、私自身が背中を押された。

社会や文化、また教育を通じてマジョリティ中心の知識や価値観が再生産され続けている。「当たり前」や「普通」といったことば、あるいはその内面化の暴力に傷ついている子どもたちがいる。この構造を変えていくためには、マイノリティの声、異なる声を聞き合う場でこれまで学んできたことをいったん捨てる、反転する、学びほぐすことが必要だ。プロジェクトで目指されたそのような学び合いの場が地域社会に増えること、そこで出会った人たちが声を紡いでいくこと、古くて新しい、だからこそ何度でも確認したいことを参加者たちと共有できたことが、「新しい価値」の創造につながっていくのだろう。

(第 2 回合宿パネルディスカッションおよび最終フォーラムファシリテーター)

## 3. 事業を終えて

人は、自らを規定するまたは他者に規定されるさまざまなカテゴリー(「性別」、「人種」、年齢、職業、「能力」、身体、容姿)によって区別され、時にもてはやされまた蔑まれもしながら生活している。

アメリカの黒人作家トニ・モリスンは、『「他者」の起源』において、おぞましい奴隷制度を支えてきた「他者」理解の源泉となった根拠のない人種理論とその継承を、自己(白人)の優越性を鼓舞する人種主義者の論文や誤った人種間関係理解を広めるロマンス(文学)、黒人奴隷自身の記述等を引用しながら、欧州系移民のアメリカの「白人」国民への同化と「黒人」の非人間化への間違った「努力」について書いている。

モリスンは、かつては黒人奴隷解放への文学的功績がたたえられてきたハリエット・ビーチャー・ストウの「アンクル・トムの小屋」における白人と黒人の「境界」の記述には、手を差し出される「救済」の必要な黒人と手を差し出す「慈悲」深い白人という設定・役割をつくり出す「他者」理解の悪弊があると記している。

モリスンは、ロマンスが生み出す「他者」理解の愚かさを自分たち(黒人)内部にも内在する危険性があることを含めて記述しているが、日本社会における「共生」が歪んだ他者理解を継承するロマンスの影響を強く受けているかどうかを私たち日本で暮らす者も注意深く見る必要があるだろう。

はじめにで書いた「ある種の強固さで日本人と外国人を分ける慣習」は、日本の憲法 10 条にある「日本国民たる要件は、法律でこれを定める」、その憲法のもとに 1950 年に制定され幾度かの改正を経た国籍法で規定された日本国民と日本国籍を持たない者の法的な線引きが適用されているわけではない。

日本人と外国人を分ける基準は、「日本人らしさ」と「外国人らしさ」に大きく依存している。多文化共生スポークパーソンたちが、国籍や出生地、第一言語にかかわらず見た目や言葉のイントネーション、カタカナ名に紐づけられた外国人性、日本人性によって色付けされ、マイクロアグレッションに晒されることが多いことを彼(女)らは本報告書のなかでも綴っている。

不条理な扱いは、気にすれば際限もなく、自らの違和感や嫌な気持ちを伝えてたくとも和やかに流れていた時間をとめるのではないか、また伝えても受け止める側の知識や感性によって無駄ではないかという不安や諦めによってやり過ごさざるをえない日常は澱を社会に蓄積させていく。

間違った色に色付けされた者の日常は、汚れた器に注がれた飲み物と食べ物を摂らされているようなものではないだろうかと思う。また間違った色に色付けしている者もまた汚

れた器に注がれた飲み物と食べ物を分け合うしかない状況に置かれている。

現在の日本の「多文化共生」が、「アンクル・トムの小屋」ロマンスの延長線で留まっているようなら私たちは、そのロマンスとまずは決別しなければならないだろう。時代は、「アンクル・トムの小屋」が必要だった 1852 年ではなく 2025 年になった。いくら人に受ける(感動させる)ロマンスであっても、そのことが虐げられている人々にラベルを貼りスティグマを残すものであればそれは「消費」でしかないからだ。

「言葉を紡ぐプロジェクト」は、現在の「多文化共生」の危うさ、うさん臭さともいうべき状況に一石いや何石も投じている。全てをまとめる力もないがプロジェクトのなかで考えたこと、感じたこと、またプロジェクトのまとめとなったフォーラムでの学びについて書きたい。

プロジェクトに関わった個々の名前は、くだけすぎかもしれないが本人たちが決めた呼称(にフルネームもつけて)を使わせてもらいたい。対話の前提とした安心して語れる環境にとって自分が呼ばれたい名前はとても大切な要素であったと思えたからだ。自分をあらわす呼称には、その人の人生、時には決意が関わっている。呼ばれてきた愛称は自分と家族や他者との記憶の愛しさでもあろうし、ルーツを表象する呼称のなかには自分のルーツと向き合うなかで勝ち得たものもある。そのことを根掘り葉掘り聞かれないことも安心できる空間、時間の第一歩であったように思う。

既に多くの執筆者が書いたことと重複せず、プロジェクトで得られたことを述べるのは難しいが、合宿参加とフォーラムの企画・開催という高いハードルのある参加者募集づくりに始まる裏方作業を担ってくれるインターンをメラティ(曽祢メラティさん)が引き受けてくれたことは本当に幸運であった。「外国ルーツを持つ者に限る」というインターン募集は、字面だけで見ると排他的なものである。なぜこのような挑戦をしたのかについてはいくつかの理由があるが、現在の日本社会では受動的な立場に立たされることの多いマイノリティ・外国ルーツを持つ者が能動的・主導的に「共生」事業にかかわる経験は、個人の枠を超えてこれからの社会にとって貴重な経験になると考えたことが最も大きな理由である。私たちの企画が 1 年前でも 1 年後でもメラティがインターンとして本プロジェクトに参加することがなかったことを考えると、プロジェクトが大切にした「出会い」という言葉を感慨深く受け止めている。

予算と運営の関係で 10 名枠となったプロジェクト参加メンバーの応募シートに書かれていた内容も印象深い。参加応募メンバーは、「共生」にとってはその前提として私の解釈になるかもしれないが「正義」を必須としていた。のちにの議論は、合宿においての「平等とは何か、公正とは何か」という学びとともに深いものになっていったと考える。

さまざまな背景を持つ若者が、「共生」にかかわる問題意識を他者と話し深めようという

プログラムは、希望のあるものではあったが、それを実現する方法は手探りで探っていくしかないものであった。そのなかで聞き、読み、話し、書くだけではないアクティビティ(アート：コリア民族楽器ワークショップと絵画ワークショップ)も取り入れたことは、とても有意義であったと思う。

絵画ワークショップを担当してくれたわっくん(涌嶋克己さん)のアクティビティでは、わっくんが大学のゼミ授業中に来た障害者が授業に参加できるようにする問題を話したいので授業の時間をくださいという申し出をわっくん以外が拒んだことで学校をやめて画家になったエピソードが語られた。好きな絵を描いて生きたいという思いと不本意でも集団にいることについての葛藤を乗り越えた若いわっくんの決断が、柔らかな佇まいと口調で語られたことは、その場にいた者にとって、思いを持って生きるということの価値を考える糧になったのではないかと思った。

合宿と成果報告会での学びは、先述との重複になることが多いので雑感やエピソード的なことを書きたいと思う。2 回目の合宿で外国人と日本人の「境界」がいかにつくられてきたかについてのパートを担当してくれた晶さん(孫片田晶さん)は、宿泊を希望してくれ翌日のプログラムにも参加してくれた。そのことが縁となりのちに自らが関わる在日コリアン集住地域であるウトロ地区のフィールドワークへの道筋をつくってくれた。

3 回目の合宿で行政(自治体)の「多文化共生施策づくり」のパートを担当してもらえた神戸市のかなこさん(中村歌奈子さん)は、自分の好きな本の話からはじめてくれ枠組みの多い役所の仕事にも人の感性が反映していることを伝えてくれたように思う。

最後のフォーラムにも登壇してもらうこととなったラポちゃん(ラポルテ雅樹さん)は、プロジェクトに参加できたことが嬉しかったと言ってくれ、合宿先のコンビニで大量のビールを差し入れてくれた。自宅へ帰れる終電に乗れるのかを心配する時間まで付き合ってもくれた。

プロジェクトの前にあった過年度の共生モデル構築事業から事業を担ってくれた丈太郎さん(加藤丈太郎さん)には、プロジェクトのなかで話してきたことを書き言葉にまとめるという重要なパートを担当してもらった。丈太郎さんとは、「言葉を紡ぐプロジェクト」に繋がる過去の一連の事業を一緒に担ってもらってきた。転職してフィールドが関東に移っても縁がつづくことを願っている。

フォーラムでの内容と登壇者は、共生スポークパーソンの話し合いによって進められ、兵庫県、神戸市の学校(教育委員会)から現在の取り組みを話してもらうことがはじめに設けられた。共生スポークパーソンにとっての学校、教育の重要性を認識させるものであった。国民(同化)教育に主眼が置かれている学校は、「多様性の尊重」や「個性を活かす」ことがスローガンには掲げられるが、学力スライスと「あるべき日本人」への同調圧力によ

ってマイノリティ性を持つ生徒とマイノリティと共に生きようとするマジョリティ生徒の居場所にはなりにくい状況にある。今の(公立の)学校教育がどうあるのか、今を生きる子どもの居場所となりえているのかに共生スポークパーソンの関心が向かったことが教育委員会関係者への登壇依頼に繋がったと思っている。

共生スポークパーソンが登壇してから語られた言葉は、一般的なフォーラムでの同調や予定調和を覆すものに溢れていた。ただそれは、けっして後味の悪いものではなく表現はよくないかも知れないが「ここまで言えば清々しい」とさえ感じるものだった。

自分のことをシャイな性格だというたえ(塩田妙子さん)は、「私たちが目指す社会は今の言う『多文化共生』社会ではない」と語る。「『多文化共生』のような普段使っている言葉をクリティカルに考えることで、より包括的な社会を築く一歩になると信じている」と言うたえは、「運転免許試験場でぞんざいに扱われる外国免許の切り替え希望者のそばにいた自分は抗議の声を出せなかった、また同じシチュエーションに遭遇した時には(私は)抗議の声をあげたい」と語っていた。「今の言う『多文化共生』」では、若者が不当な扱いを受ける外国人のために抗議の声をあげる力をつけられないということをたえは言いたかったのではないかと思った。

アメリカからの帰国児童であったたかや(野津貴哉さん)は、日本の学校で学ぶ差別はアメリカの黒人差別への抗議としてローザ・パークスらがはじめたバスボイコット運動などを取り上げるが、日本の在日コリアン差別とその撤廃運動を取り上げない。このことは、マイノリティだけでなくマジョリティにとってマイナスであると述べた。人種差別は、海の向こうのことであり日本には人種差別がないと思わされ育てられることは、日本社会の同一性幻想を結果としてより強固にしている。結果は、日本の同調圧力を強めて日本人・マジョリティのなかにもある多様性、たかやのように「日本人らしい」容姿でも英語を第一言語とするような存在を生きにくくしているというロジックを語った。なぜ少数者のことが、多数者にとっても大切なことになるのかを明晰に示している姿は頼もしかった。

ひま(下村向日葵さん)は、総務省の「多文化共生」のベースに「共生を妨げるのは日本語が話せないからや日本文化に慣れていない。知らないからだという考え」があるため、差別の再生産をとめるための移民政策、学校教育、メディアの偏った報道の是正が進まないことを指摘し、「波風をたてないことは生きづらさを許容し、未来の世代にもこの生きづらさを繋げることになる」という言葉を紡いでいる。またひまは、「共生」は、人種や民族、国籍に限ったことではなく「生きづらさを許容しない→公正を目指す」普遍的な事柄であるともまとめてくれた。

途中から合宿に参加し共生スポークパーソンとなった賛(たすく：オキーレ賛さん)は、日本の法制度や学校教科書といった公的なシステムが日本人と外国人のステレオタイプを

増幅させ、多くの人間を生きづらくしていることを語った。英語の教員免許を取得途中の賛は、英語の教科書に「英語が上達したら街に出て『外国人』と英語で話そう」という指導があることをとりあげ、持ち前のユーモアを交えながら街に出て誰を「外国人」として認識して話しかけるのか。教科書が「外国人」＝英語、より深く教科書の意味を考えると「外国人らしい人」＝英語という誤った認識を刷り込んでいる現状をとりあげた。ステレオタイプは自然に浸透したのもではなく、公的システムがステレオタイプを広め定着させている。賛は多くのマイクロアグレッションを受けてきたが、その根源の社会的要因を伝えた。

学校教員を目指すブラジル国籍のフェリペ(清水フェリペ隆志さん)は、他のメンバーと違って教員採用にあたって外国籍のままであると常勤講師採用という国籍による壁に向き合うことになっている。数少ない日系ブラジル人として渡日したルーツを持つ教員が、「みんな違うから面白い」と教室で語る姿はとても説得力を持つだろう。にもかかわらずフェリペが外国籍であるということでヒエラルキーの下位にある職位に就かねばならない学校は歪な空間でしかない。教員不足が深刻な状況でも国籍によるヒエラルキーを守ろうとする日本政府(文部科学省)が考える「多文化共生」社会とはいかなるものかを問いたい。

なほ(塚本南帆さん)のプロジェクトがつくり出した「居場所」が、共生できる社会づくりにとって大きな意味を持つのだという発表は、かつて在日コリアンの人権運動のなかで、出自を否定され自己否定を内在化させてしまった子どもたちが社会に討って出ていくための砦を地域で作ろうと言っていたことをなぜか思い出した。安心できる場、ほっとできる場では終わらない、自分たちが見つけた価値のために能動的に活動していく元気が得られる居場所を「言葉を紡ぐプロジェクト」が生み出したのであれば、望外の喜びである。

アイシャ(サラウディン柳愛紗さん)は、発表の最後に「このフォーラムに来る京都でも実はマイクロアグレッションにあいました。京都駅に行くのはどう行けばいいですかと声かけられたんですが、『(私の外見で)ごめんなさいわからないわね』と言われて、関西弁で『わかりますよ』と案内して来たんです」と明るく話をしてくれた。フォーラムの場が、マイクロアグレッションをネタに自分のその後の切り返しまで明るく語れる場であることは、プロジェクトの成果ではないかと受け止めた。

フォーラムにファシリテーターとしてゲストスピーカーとして登壇してもらったきよぽん(今井喜代子さん)とラポちゃんには、時間配分がうまくいかず持ち時間を大幅に短縮して担当してもらった。にもかかわらず心に残る話をしてもらえた。

合宿にも来てくれたきよぽんには、時間のないなかで共生スポークパーソンの言葉をまとめるむつかしい役割をフォーラムタイトルにある「手繰り寄せてつくる相互理解」を体現するように進めてもらえた。なかでも「『多文化共生』という言葉は私たちが求める社会

ではない」とするが、変わる言葉をみつけられなかったという共生スポークパーソンの葛藤について、アンドリエンヌ・リッチの「これは抑圧者の言葉でも、それが要るのだ、あなたと話すためには」という言葉を教えてもらえたこと、共生社会を願う人の一歩を進めるためにドアを開けること、次に来る人のために開けたドアを閉じないようにする意義を伝えてくれたことには感謝しかない。

ラポちゃんが、放った自分が 10 代前半の時に「共生にむけてという授業をします」と学校で言われた時の反応は、「ヘドが出るだったと思う」という言葉は、言葉が意味を持たない学校という環境か言葉が劣化して意味を失ったのかそれともどちらもが重なった結果なのか想像しながら聞いていた。「共生」という言葉は、「日本人より日本人らしくならないと受け入れられない」と刷り込まれていた外国ルーツの少年には届かない言葉になっていた。言葉は大切なものなのに何も生みださない使われ方が続くと人を傷つけるものになってしまう。自分を問うことなく人に投げつける言葉を発していないか共生を語る言葉を再考しようと呼びかけているように私には感じられた。

成果発表会のはじめで、40 年前の若かった自分が経験したことを話させてもらったが、若いということを無条件に賛美することは、「結構嘘っぽい」と今振り返って思う。若い人でも思慮深く、思いやりに溢れ、人と協調して物事を成し遂げることができる人もいるとは思うが、私はそこからかけ離れたところで生きていた。そんな無知で無遠慮で思いやりに欠けた人間でも、当時はあらゆるところで日常的に使われていた「誰でもできる」ことを表現するのに自分たちの民族を揶揄する言葉が使われていて、それをなくそうと努力している人たちがいることも知っていた。

ただあまりにも長い間、朝鮮半島ルーツの人間を揶揄する言葉が使われすぎていたからか使う側の多くの人間には他者を傷つけている自覚もなく、へたすれば在日コリアンの多くもその言葉を使っているありさまだった。情報の非対称、共通の理解が欠けている状況で起きている差別の継続である。

私は大学 2 年までに取らなければ留年が決まる必修科目を 1 年目に落とし、2 年目に再履修した授業を受けている時にその言葉が担当の先生から発せられる場に遭遇した。当時、まともに授業にも出ず雀荘に入り浸る生活をしていた自分が、どの面をさげて大学教員に抗議できるのか、留年したらどうするのかとすごく思い悩んだことは今も覚えている。

当時ほとんど食堂のカツ丼をたべるために出入りしていた人権サークルの部室で、意を決してといよりはたぶん虚勢をはって差別発言について先生のところへ話をしに行こうと思うとサークルメンバーに話をして、普段踏み入れない教員研究室に向かった。さっきの授業で先生が話した言葉は差別発言なので使わないでほしいと結構しどろもどろで話した。

先生は差別発言後によく使われる「悪気はなかった」「知らなかった」というようなことは言わず、「そうでしたか、申し訳なかった」というような誠実な対応をしてくれた。今でも思うが、その時に単位を落とされたり先生に開き直られたら「差別」に対して臆病になったり、見過ごして過ごすようになったかもしれない。

その後、雀荘で反省もせず過ごしていた私に留年して 1 年生をやり直していた友人が、「今日の授業で先生が、『学生から先週の授業で自分が発した差別発言に対して抗議がありました。皆さんに訂正したい』と言ってたぞ。金やろ」と話しかけてきた。

サークルで話を聞いてくれた学生、雀荘で「金やろ」と茶化すように「褒めて」くれた友人、次の授業で発言を訂正してくれた先生、皆のおかげで今は耳にすることもない蔓延していた差別語がなくなるための活動の何万分の一かもしれないが一端を担えたのだと思う。

自分に与えられているカテゴリーにどう対応すればよいのか。それはマイノリティ、マジョリティに関係なく課せられた課題だが、その課題は一人で担うには重すぎる。だからといって人に担ってもらうものでもないだろう。だから若い時に「よい出会い」があって「よい語り」ができたらいいなともう戻ることはできないけれど考える。

共生モデル事業の構築という宿題と私たちが進めた「言葉を紡ぐプロジェクト」の相性がよかったのかはわからないが、プロジェクトが投げかけたボールが受け止められ、返され、違うところにも周りまた戻されるようなキャッチボールの輪が広がるようなプロジェクトの進捗は、準備も大変で、とても疲れるものではあったけれど関わる人たちにとって「楽しい」、「嬉しい」ものになっていった。それを今は誇らしく思っている。

「ことばを紡ぐプロジェクト」は、1 年にも満たない期間のなかで人にとって大切な時間の多くを「外国人」と「日本人」の「共生」について考えることに費やしてくれた若者たちの対話とそれをまとめるために尽力した人たちの活動である。そのあゆみを振り返った時、主催する側として事業を企画する際には、「人材育成」という言葉を使った、使うしかなかったことが思い返される。

事業を終えた今思うことは、かかわった人々にとって共に育つあゆみ、「共育」のあゆみが「ことばを紡ぐプロジェクト」の本質であったと感じる。私自身は、多くの学びと示唆を共生スポークパーソンとゲストとして参加してもらった人々からもらい、たくさんの気付きを与えてもらえた。少しは成長できたかと勝手ながら思っている。

本プロジェクトに参加した人たち、またプロジェクトを支えていただいた人々、本書を手にとっていただいている方々にとっても「言葉を紡ぐプロジェクト」が皆さんにとって成長する一助であってくれたらと願っている。

そんぎる(金宣吉)

## 番外編 ： ウトロフィールドワークの報告

2024 年 12 月 8 日(日)に「ことばを紡ぐプロジェクト」メンバーを募り、ウトロ平和祈念館へ行った。本プロジェクトでも大変お世話になった孫片田晶さんに案内いただいた。下は参加したメンバーの一人からの報告である。

下村向日葵

ウトロ平和祈祷館は、在日コリアンの方々へ行われてきた人権侵害の歴史、そして在日コリアンの方々と周辺住民の今日まで続く闘いの様も知ることができる、日本において重要なミュージアムである。私が通った高校の近くに存在するウトロ地区に、KFC の皆さんと訪問することの、家族が地元に来てくれたような感覚と共に、在日コリアンの方々の闘いは、全国各地でのことである、という実感も湧いた。祈祷館では、3 年前の放火事件の様子から、在日コリアンの方々の地区での生き様、そして能楽隊率いる地域の人権運動の様子が語られている。私たちが訪問した際、地区に住むオモニの皆さまがわざわざ来てお話をしていただいた。少し照れながらも昔の写真を見ながらこうだったなあ、〇〇さん美人だなあ(本当に美人ばっかり！) などと話す様子は、在日コリアンの方々としてではなく、私と同じ女性として、その諦めない心と行動力に大きな尊敬を抱いた。最近も韓国の仁川で披露された能楽隊の皆さまは、今でも目を輝かせながら、仲間と演奏することを「青春」と語り、いかに彼女たちの人生が逆境のなかで力強く燃え上がるものであるかを感じた。彼女たちの、妻であり母である以前に、1 人の人間、そして在日コリアンであるという強いアイデンティティの表現に、感銘せざるをえない。彼女たちの様子を見ていると、私も同じように、負けない女性でありたいと思うことができ、また彼女たちが生きてきた戦いの歴史を無駄にするような社会のあり方は、許してはいけないのだと改めて思った。そして、放火事件などからも見えるように、この戦いはまだ続いており、私たちの世代が彼女たちの努力を受け継いでいく必要があると感じた。

付録 ：（１）2023 年度「響き合う『多文化共生』フォーラム」

# 響き合う「多文化共生」フォーラム

300万人以上の外国にルーツを持つ人々が生活を営んでいる日本では、
1990年代半ばから「**多文化共生**」**施策**が進められてきました。

各地の自治体や国際交流協会が、**共に生きる社会**を目指して
日本語学習の機会や生活情報の提供などを模索してきました。

現在ではすべての都道府県に多文化共生施策がありますが、
神戸定住外国人支援センター（KFC）が2022年度に行った調査では、
外国人住民が多文化共生施策を**そもそも知らない現状**が見えてきました。

また、中国残留邦人や技能実習生は
地域社会・地域住民との**接点がなく、孤立している**ことも分かりました。
これらの状況を前に、私たちは何から始めていけばよいでしょうか。

## ―― 自分のことばをつくり、つながる ――

**このフォーラムでは、組織の内外で響き合う「多文化共生」の実現に
取り組んできた講師を交え、人と人がつながり、響き合う「多文化共生」を
実現する第一歩を「自分のことば」で考える時間を持ちたいと思います。**

**時間 13:00～17:00**〈開場12:30〉
**会場 ふたば学舎 2階 2-A**
神戸市長田区二葉町7-1-18

**参加無料**
要申込
（定員50名）

**2.24** 2024〈土〉

**13:00～ はじめの挨拶「神戸市における多文化共生にむけた取り組み」佐々木 昇一**［(公財)神戸国際コミュニティセンター常務理事］

**13:15～ 基調講演**

**「共生の場の実現にむけて」**
「多文化共生」の実践の経験をもとに、歴史のなかで実際に起きた実践を参照しつつ、「共生」とはそもそも何で、どのようにあるべきなのかを考えます。

**金 迅 野氏**
かながわ国際交流財団、川崎市ふれあい館などの勤務を経て、立教大学キリスト教学研究科特任准教授。著書に『ヘイトをのりこえる教室：ともに生きるためのレッスン』（2023、共著）大月書店。

**14:10～ 話題提供**

**「響き合う『多文化共生』の実現をめざして」**
行政を巻き込んだ外国人住民世帯への全戸調査、子どものための「第三の居場所」づくり、外国ルーツを有する職員の採用などを通じ、組織の内外でどのように多文化共生を実現してきたのかをお話しいただきます。

**山野上 隆史氏・山根 絵美氏・三木 幸美氏**
**（公益財団法人 とよなか国際交流協会）**
1993年設立。地域や学校とともに多文化共生の「地域づくり」と「人づくり」を推進すると同時に、マイノリティである外国人が自立できる「しくみづくり」をすすめている。著書に『外国人と共生する地域づくり：大阪・豊中の実践から見えてきたもの』（2019）明石書店。

**15:25～ ワークショップ** **「自分のことばをつくり、つながる」**
**リソースパーソン：神戸市在住の外国にルーツを持つ人びと　モデレーター：加藤 丈太郎**［武庫川女子大学］
響き合う「多文化共生」に向けては、一人ひとりに何ができるのでしょうか。国籍、組織などの枠をこえて、神戸市内に暮らすリソースパーソン（外国人住民）の声に耳を傾けながら「自分のことば」を考えます。

**16:30～ 共有と振り返り**　　**16:55～ おわりの挨拶 金 宣 吉**［NPO法人 神戸定住外国人支援センター理事長］

**お申し込み・お問合わせ**
**申し込み〆切 2/17（土）**
**WEB申し込みフォーム**

特定非営利活動法人神戸定住外国人支援センター［KFC］
TEL 078-612-2402　FAX 078-612-3052　E-mail kfc@social-b.net

主催／NPO法人神戸定住外国人支援センター（KFC）　共催／公益財団法人神戸国際コミュニティセンター（KICC）
後援／神戸市・神戸市教育委員会・兵庫県・兵庫県教育委員会・（公財）兵庫県国際交流協会（HIA）・神戸大学海港都市研究センター
本フォーラムは公益財団笹川平和財団2023年度「新人流時代の共生社会モデル構築事業」のひとつです。

2024年2月24日(土)ふたば学舎にて「響き合う『多文化共生』フォーラム」を実施した。以下より、はじめの挨拶、基調講演、話題提供の文字データと発表資料をまとめる。その後行ったワークショップは、全体共有での各グループの発表内容の概要を記載している。

①はじめの挨拶「神戸における多文化共生にむけた取り組み」

佐々木昇一氏(公益財団法人神戸国際コミュニティセンター常務理事兼事務局長)

KICC の佐々木と申します。共催団体を代表しまして、ご挨拶を兼ねて、神戸における多文化共生の取組についてお話をさせていただければと思っております。

本日、3連休の中日ではありますけども、ひじょうに多くの方々にご参加いただきましてありがとうございます。天気も回復しておりまして、ちょうどよかったかなと思っております。今日は学校関係者の皆様方、それから民間の団体の方、そして兵庫県、神戸市からは行政、または公的団体から多数のご参加をいただいております。ありがとうございます。

私、この3連休で実は昨日、東京行って、全然、走りのろいんですけど走りのイベントをやってきまして、とんぼ返りして、昨日、実は大阪マラソンの受付して、明日、ちょっとだけ走る予定にしています。最近これ、替え玉のランナーを防止するためか、こういう輪っかを手にはめさせられています。

そんな話はさておき、まず、最初に私からは基本的な数字のところを押さえさせていただこうかなと思っております。神戸市の外国人の方々の人口の状況ということで、ここにグラフを示させていただいております。約10年ほどの数字を載せておりますけれども。こういう形で、一度コロナのときに下がってはいますが、トレンドとしましては増加傾向ということで、昨年の12月には5万4,274人の方々。年明けになりましたらさらに90名ほど増えておりまして、今年の1月には5万4,365名の人口になっております。

そして、外国人の方々の国籍、地域別の人数でありますとか、あるいは在留資格別の人数ということで、こちらに円グラフに示させていただいております。国籍、地域別でいきますと、神戸の歴史的経緯の関係もありまして、韓国籍、朝鮮籍の方とか中国籍の方がもともと多かったんですけども、ベトナムの方が8,300人ほどおられて、アメリカ、ネパール、フィリピンと、こういう順番になります。主にはベトナムの方以降がいわゆるニューカマーの方々ということです。特に最近、増加率が高まっているのがこのネパールの方々ですとか、バングラデシュとか、こういった国から来られる方がひじょうに多いという特色があります。

また、在留資格別なんですが、こちらでは、これも歴史的な経緯がありまして、特別永住の方、例えば永住者の方が多いわけですけれども。増加していってるのは永住者の方であるとか、留学目的で来られた方、また、あるいはそれに伴って帯同して来られている家族滞在の方の割合が増えてきています。あと、特定技能も微増しているという状況にございます。

神戸市における、今日、神戸の行政の人もいっぱいいるんで、私がしゃべるのはちょっと僭越なんですけども、神戸における多文化共生の考え方ということで簡単に挙げさせていただいております。地域の課題への対

応に加えて、特定の外国人が孤立しないように、日本人と外国人が地域で共に生活することのできる多文化共生のまちづくりの推進が必要であるという認識のもと、日本語学習の機会を提供するとか、「やさしい日本語」の活用による外国人にも分かりやすい情報提供の発信を行おう、あるいは多文化共生の推進の拠点において、多文化交流事業であるとか、地域の防災訓練の参加など、地域における日本人と外国人との交流を推進していこうということが基本的な考え方となっております。

それを踏まえまして、私の所属しております神戸国際コミュニティセンター、KICC での事業の柱立てを簡単に触れさせていただきます。

まず１つは、情報発信、相談、通訳、翻訳支援ですね。そして日本語学習支援、それから国際理解の促進。それ以外にも外国にルーツのある児童の学習支援とか、外国人向け防災研修なども実施しております。

さらに、神戸市役所では今年度、今年度といいましても昨年なんですが、在住外国人の方、あるいは地域の方々にヒアリングを実施しております。主に、今日も来てもらってますが、地域協働局の職員の皆さんで行ってもらっております。ここにありますように、趣旨としましては、在住外国人の方々の生活の状況の把握をまず進めましょうということで、地域のなかで生活していく際に、外国人の住民の方、それから従来住んでいる日本人の地域の住民の双方が抱えている課題を明らかにして、その解消策の検討の実施に生かしていくということで、かなりの数の外国人の方、あるいは関連団体にヒアリングをしております。ヒアリングの内容につきましては、外国人の方々には生活の状況とか、コミュニティの状況、生活に係る相談先とか情報源、困り事等々。地域には外国人住民の増加に伴う課題であるとか、住民との交流状況についてヒアリングをしております。

そのヒアリングのなかで浮かび上がってきた課題なんですけども、ここに掲げてあるような項目が見えてきたということです。日本語学習に関して、あるいは生活についてですけれども、総じて行政であるとか、我々のような公的機関が発している情報、あるいは伝えようとしている情報と、外国人の当事者の皆さんが必要とする情報が必ずしも一致していないこともあってか、発している情報、あるいは団体そのものについても知られていないという課題が浮き彫りになってきました。

さらには、ここには書いてませんけども、地域と外国人の方がそれぞれ、相互理解とか交流に向けて一定のニーズはあるんだと。ただ、そのきっかけとかノウハウがよく分からんなということも明らかになったり、あるいは、新たに来日した児童生徒の学習支援といいますか、学校での支援を一層充実させる必要があるということも課題として見えてきています。先日、市長から来年度の予算案、編成案が発表になっておりますけども、その辺の課題へ対応した予算の内容も盛り込まれています。

先ほど申し上げました課題のなかで、行政なり、公的機関が必要だと思われる情報を届けようと日々努力はしてるんですけど、なかなか伝わっていない実態があります。今日のフォーラムのおおもとになっているKFCさんでされた実態報告書の中にも書かれているんですけど、これ、付箋貼ってます、読んでますよと(笑)。要点があるところ、ちゃんと読んでますということです。そういう中にあって、我々として今、努力していることは、ここにありますような、外国人の方が立ち寄られるであろういろんな先、例えば宗教施設であったり、

エスニックレストラン、食材店とか、あるいはキーパーソンと思われる方々もそうなんですけど、そういったところ。あるいは、場合によっては同胞コミュニティ、いろんな国籍別で、例えばベトナム人会みたいな団体さんがあったりしますんで、そういったところに出向いて、まず存在を知っていただくとか、こんなことやってますよというようなことをお伝えをさせていただいているというところです。

それから、神戸の特色として、外国人を支援されてる団体がひじょうに多いです。特にこの長田近辺にもひじょうに多いということで、私どもも関係性を構築、維持させていただいています。そういった方々にも我々の存在を当然ながら知っていただき、必要に応じてつないでいただいているような状況にあります。

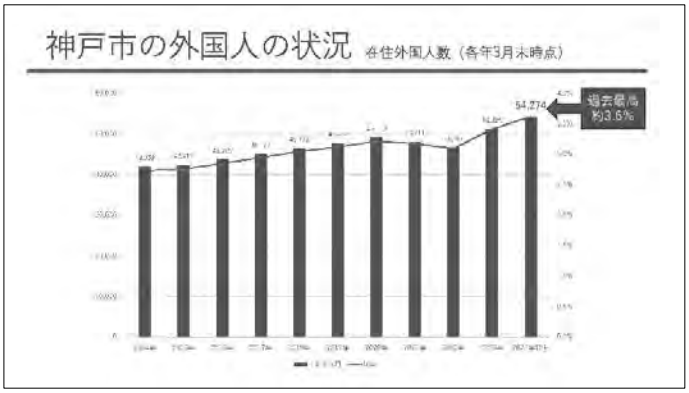
あと、どこにもつながっていない外国人の方々も当然おられて、この辺がどう、我々の存在も含めて、必要な情報をお届けするかというところがひじょうに課題かなと思っております。

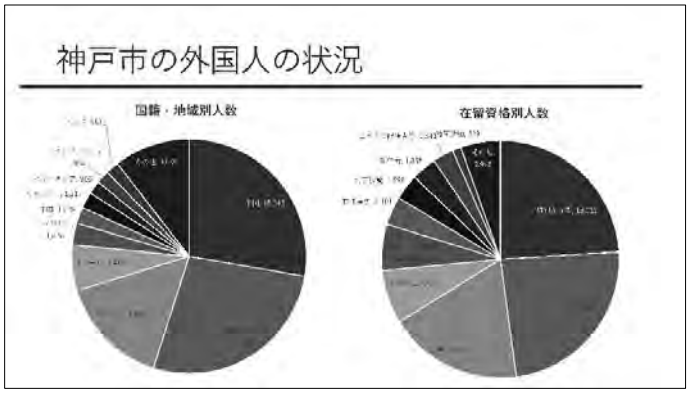
こういった努力をしているんですが、さらに関係者がつながっていくためには、従来の日本人側の団体さんもいろいろあります。地域の団体さん、あるいはいろんな活動をされているNPO団体も含んだ市民団体の方々。あるいは今日来られてますが、学校関係の皆様方、教育関係の皆様方、あるいは外国人の方の勤務先などの企業さんとか、いろいろな中間支援団体、監理団体さんといった方々もあります。そういったところとつながり、さらにその間をつなげていくことによって、外国人の方が多層的にいろんなことが伝わっていくなり、つながっていくことができないかということを今、模索しているところです。

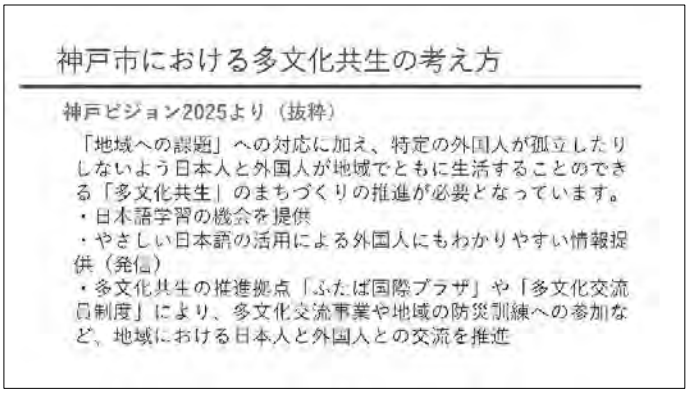
最後になりますが、今日のテーマ、「響き合う」ためにということでございますが、今日、先ほど冒頭に申し上げました、いろんな方々、バックグラウンドの方々来られています。企業の方もおられましょうし、NPOの方、それから学校関係、あるいは行政、公的団体、いろいろな立場、ご所属の方々が来られているんですけども、今日は一旦、そういった所属や立場を超えて、響き合うということを考えていただけたらどうかなと思っています。実は今日、先ほど打合せをやってまして、金理事長から、「『あのとき、おまえ、あんなこと言うとったやろ』って、今日は言えへんからね」と言うてくれてますんで、行政の方々も安心して語っていただければな、心理的安全性は今日は保たれていると思いますので、よろしくお願いします。

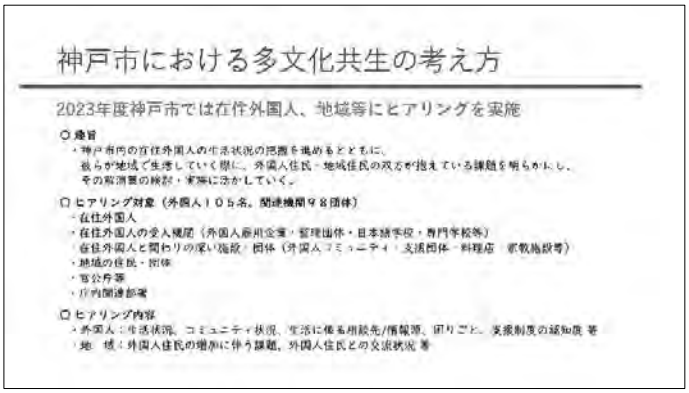
ここにも書いてますが、3つあるかなと思っています。相手の話を聴くにあたり、相手に関心を払って、話をよく聴く。聴くはあえて耳へんの「聴く」にしております。そういう意味で。2つ目は想像力豊かにということなんですけど、お互い、言語化されていないような部分もあるのかなと思いますので、そういった感情とか思いにも想像力豊かに酌み取る努力をしていただければいいのではないかと思います。最後に、これも今日のキーワードになっておるんですが、自分の言葉をつくり、語るということですね。こういったことを心がけていただくことで、今日、フォーラムから得られるもの、また、それぞれに持ち帰っていただけるものが違ってくるんじゃないかなと思います。

ということで、私の冒頭の挨拶と、簡単ではございますがさせていただきたいと思います。本日はよろしくお願いいたします。





## 神戸市における多文化共生の考え方

2023年度神戸市では神戸で暮らす外国人、地域にヒアリングを実施

◇ヒアリングにより見えてきた外国人の困りごと（抜粋）

**日本語学習**

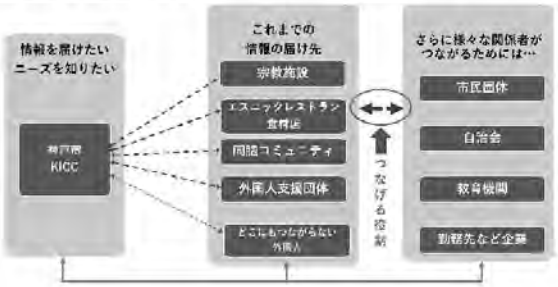
- 継続して学んでいるが、業務に関する日本語の習得が難しい
- 日本語を学んでもアルバイト探しや医療へのアクセスが難しい

**生活**

- 携帯電話契約、銀行口座開設、住居の確保などは支援者によるサポートが必要
- 防災については、課題として認識されていない

**行政が出している情報と当事者が必要とする情報が一致していない**

## そもそも知らない現状を改善するために・・・
## 双方向での情報共有ネットワーク




## 響き合うために・・・

**相手の話を聴く**

**想像力をゆたかにして**
**自分のことばをつくり、語る・・・**

②基調講演「共生の場の実現にむけて」

金迅野氏

こんにちは、金といいます。神奈川に住んでいます。神奈川県の国際交流協会とか、川崎市にあるふれあい館で仕事をした経験があります。そのことが今、この場でどのぐらい意味があるのか、少し疑問の点もありますが、振り返りながらシェアさせていただければと思います。

多文化共生施策が外国人の人たちに伝わってないということを理事長のほうから問題提起されました。でも、そもそも多文化共生の施策、あるいは多文化共生や多文化主義などの考え方が、実は時代とともにちょっとずつ変わってしまってきている。その辺をまず、押さえてみようと思います。

もう一つは、僕も日本で生まれ育っていますから、外国人は外から入ってくるという意識をもちかねないのですが、ほんとうにそうなのかしらということを、日本に住む者として考えてみようと思いました。

さらにもう一つ、実は、多文化共生の施策が進んできた果てに、この10年弱ぐらい、外国人として、「殺せ」とか、「帰れ」とか、言われる時代になってしまったことです。これは予想だにしなかったことですね。誰かを憎み、おとしめるというマインドの発生する一方で、人間は、人と人がつながる方向へと動くこともできる。この分岐について少し考えてみようと思いました。

「私だってかわいそう」というのは、ある学生が言ったとされることです。日本のトップスリーと言われるような大学のあるゼミで、見た目、何の苦労もないと人に思われるような学生が、多文化共生などの施策の重要性は理解できるのですが、でも・・・というところから発言した言葉なんです。「私だってかわいそうなんです」。この言葉をどう捉えるか。僕はこの発言はとても大事だと思っています。

もう一つ、さきほど、常務理事さんがおっしゃったように、多文化共生にかかわる「需要」をちゃんと把握できてないんじゃないか、ということです。つまり、施策の中身が届いてないという以前に、施策の中身を「届ける」ために、人と人をつなぐ人が必要だというお話をされました。そのことをめぐって少し前に考えたことをシェアしようと思います。多分、時間がないので5番はできないと思いますが、最後のところで少しシェアできればと思います。

まず最初に、「多文化共生」という言葉を僕ら使いますけれども、もとは「多文化主義」“multiculturalism”という、カナダとかオーストラリアとかアメリカで使われ始めた言葉がもとになっています。「多文化共生」という言葉は日本にしかないことを、皆さんご存じだと思います。

ちょっと練習問題。これ、いつのどこの写真かって分かりますか?この場所が、今、どうなってるか、お見せしますが、東京ドームです。東京ドームのあの敷地内にこういう朝鮮部落があったんですね。今、知っている人は多分ほとんどいないと思うんですけれど、実は後ろを向いているのは母親で日本人です。僕に韓国語

を教えたり、あるいはキムチの漬け方を教えたりする、何か不思議な人でした。先月亡くなりましたけれど。僕は、よく自分のことを「不純」と説明するのです。それは、ベトナムの詩人で映像作家のトリン・ミンハという方がいて、アメリカでも活動もされました。その方が、アイデンティティーというのは、すべからく不純であるべきだと言ったのですね。つまり隅から隅まで何かであるという人、いないはずなんです。いろんな要素で僕ら、構成されているでしょう?例えば男、上司、さえない部下、いろんな要素がありますよね。父親、あるいは息子、いろんな要素があるはずなのですが、その1点だけを取り出して、そこが肥大化するということが起きる。アイデンティティをめぐって、隅から隅まで私はこうだという言い方が僕にはあまりしっくりこない。朝鮮学校出ですけれども、朝鮮学校で、僕はすごく伸び伸び過ごしました。朝鮮学校、いい思い出もたくさんあるんですが、一方で、母親が日本人だということで、急に居場所がなくなるような瞬間を経験しています。たとえば、そういう経験を踏まえて、僕はやはり「不純」だなと言いたいのです。

金芝河という韓国の詩人が政治犯になったときに、文化の定義を問われて、何て答えたかというと、「文化というのは戦いの結果だ」と言ったことがあるんですね。僕なりの「戦いの結果」と言うと不遜でちょっと大げさかもしれませんが、しかし「不純」であるということ、つまり何かの状況のなかで、自分を射抜きながらその何かを眼差すということ。そういうからだを持つ者であることを前提にこれからのお話をしたいと思います。

これも、家族写真ですが、母親の姉は台湾人と結婚してるんです。これは、ある正月の写真ですけれど、八角のにおいとお節のにおいとキムチのにおいが一緒になってるような、そういう記憶があるんです。もちろん大人たちは、勝手にけんかをして、子どもがそわそわしているときに勝手に仲直りして、ふざけんなよと思ったことを覚えています。所在なさげ、不安げな顔で写っている少年が僕ですが、「多文化共生」とまでは言わないけれど、多文化的な何かの原風景を、この時、僕は経験したと言えるのかもしれません。

在日外国人の数ですが、約293万(2023年6月末法務省発表)。国全体の推移ですが、こんなふうに増加してますね。これは神戸と多分、軌を一にしているのではないでしょうか。「多文化共生」という言葉ですが、「多文化主義」と「共に生きる」という言葉の合成語です。日本のなかで、例えば差別部落とか在日コリアンが日本の社会で「共に生きよう」ってラブコールを送ってきた実践のなかで、「共に生きる」という言葉は生まれているはずです。一方、「多文化主義」というのは、先ほど申し上げたように、オーストラリアやカナダやアメリカ合衆国などで使われ始めた言葉です。「多文化主義」と「共に生きる」という言葉が合わさって「多文化共生」という言葉が生まれたのですが、初出にはいろいろな説があって。僕が知る限り、一番古いのは、風巻さんという僕と一緒に本を書いた人が、少なくとも1991年ぐらいに使い始めたらしいです。欧米で使い始められた「多文化主義」と「共に生きる」が合わさって「多文化共生」という言葉が90年ぐらいに日本で使い始められたらしいということは確かなようです。

さて、これは、僕が努めていた国際交流協会のニュースレターなんですが、これは創立したてのときのものです。当時、最先端の「国際交流」がホームステイ。今は、笑われるかもしれませんが、当時は、本気で「最先端」であった。これは「ポーランドウイーク」。西欧や米じゃない、ちょっとずらしている、というのが格

好よかったらしいです。さすがに、10年たつとアジアに目を向けますね。インド写真展。つねに「最先端」を走っているという自覚に満ちていたのかもしれません。

92年になると、「内なる国際化」という施策テーマを神奈川県が打ち出すんですね。国際交流協会でも軌を一にして、たとえば、この「ことばの地図」というのは、病院がどこにあるか、どこに行けば相談できるかという地図をつくった。ハンドアウトできるように。いろんな言語で、手渡しするところが結構画期的だったようです。そして、多文化主義をテーマにしたスタディーツアーを企画しています。これが僕がいた国際交流協会の展開した事業のざっとした流れです。

さて、90年代から2000年にかけて、オーストラリアやカナダやアメリカで展開された多文化主義は、「福祉多文化主義」や「公定多文化主義」とも言われます。どういうことかというと、経済的に、社会的に、公正さを外国人にも当てはめる、自己決定とか文化的差異の権利を承認する。積極的なものなのです。80 年代は affirmative action とか言われましたけども、その流れを酌んでいると思われます。多文化的シチズンシップを承認するという、結構、強い流れだった。

ところが、2000年を超えてグローバリズムが進展すると、どうなったか。ある種の政治家たちは、「多文化主義は失敗したんだ。白人たちを見ろ、移民のせいで職を失ったじゃないか」というキャンペーンをはったりするようになるわけですね。これは、事実とは違うのですが。要するにナショナルなシチズンシップというのが、特にアメリカなんかでは、白人の権威に重ねられて、「我々＝白人が逆差別されてるんじゃないか」というような言説が膨れ上がったりします。しかし、だからといって多文化主義が失敗したのではなくて、マイノリティの権利保障と、ナショナルなシチズンシップをどうにか両立させようという努力が2000年代から今まで続いている、という整理を、多文化共生、多文化主義の研究、第一人者の一人である、慶応大学の塩原さんという社会学者がしています。

今起きていることは、マジョリティと移民がそれぞれが経験するリアリティーが分断されてしまっている。移民のせいで俺たちは職を失ったというリアリティーを感じている人と、そうではなく、移民として満たされない、やっぱり差別されてるというふうに、経験が分断されているというイメージですね。今、そういう時点にある。

カナダとかオーストラリアでのいろんな研究を踏まえて、塩原さんのまとめと、最後にジジェクという人のまとめを入れました。グローバリズムの進展とともに、自己責任によって、自己啓発に努めて企業活動に参加できる高度人材が生じている。これは、日本でもよく聞く言葉です。欧米では global multicultural middle class と言うらしい。この人たちは、金もうけしてください、落としていってください、景気よくしてください、というふうにすごく歓迎されます。一方で、下層にとどめられる移住労働者というのは2級市民、半市民、非市民というふうに眼差される。こういう分析は、さっき申し上げたイメージの分断と重なりうるものかもしれません。

一方で、塩原さんが言ってるのは、深い次元で人間に起きてること。これは外国人であれ、日本の場合は日本人であれ、ホストの側であれ、ゲストの側であれ、人間がホモ・エコノミクス化しているということです。

つまり経済の尺度が人間の生を貫徹し始めちゃっている。そういうことへの疑義が今、多文化主義、多文化共生という言葉をめぐる現場から出されるべきじゃないか。これが塩原さんの意見です。

ジジェクという人はリーマン・ショックのときにウォール街で反対運動を若者と仕掛けたりする面白い学者なんですけれど、東ヨーロッパ系の学者です。曰く、企業というシステムが一般化した。それは、単に、僕たちが企業で働いてるというだけじゃなくて、倫理観とか、企業や経済の論理みたいなものが僕らの生活の中に根づいちゃってるということです。個人は労働を強いられ虐げられている、そういう主体であるだけではなくて、不断に自分を改革し自身をプロジェクトに仕立て上げてしまう。生き生き生きるとか、何か無駄なことしながら、ほっこり生きがいを感じるとか、そういうことはことごとく捨象されて、ただ単に「プロジェクト」として自分をつくりあげていく、そういうベクトルのなかで僕らは生きているんじゃないか。学者の意見ですから、鋭すぎると感じるかもしれませんが、あながち、これは間違いではないんじゃないかなと僕は思います。皆さん、どう思われますか。

日本においては、さっきも常務がおっしゃったように、「地域における多文化共生」、「生活者としての外国人」という言葉は、とても大事なものだと僕は思うんです。ところが今、地域や地方自治体ではなくて、国のなかで起きていることは、地方創生施策の影響によって、特定技能を持つ高度人材をどんどん受け入れましょう、ということです。これは、中産階級、超市民を優遇する、欧米のやり方と一緒ですね。似たようなことを日本もやろうとしている、もしくはそういう事態がすでに起きていないか。だから「外国人材を適正に受け入れ、共生社会の実現を図ることによって、日本人と外国人が安心して安全に暮らせる社会」という文言が生まれている。これ微妙ですけれど、地域における多文化共生とか、生活者としての外国人とかという視点と微妙にずれていると思いませんか。これが、「国家が目指す多文化共生」の世界観だとしたら、僕たちは、「地域における多文化共生」という文脈が薄れていることを警戒しなければいけなのではないかと思うのです。

これは、1、2、3は塩原さんのまとめですけれど、住民の視点が薄れちゃっている。住民なのだという視点が薄れちゃっている。「この人は使いものになるのか、ならないのか」という、その視点だけ。それは「国益」の視点ですよね。それが優先されて、外国人が選別されている。さっきの非市民、超市民、2級市民みたいなこの選別が今、この地でも起きているのではないか。これは塩原さんの分析です。僕も間違いじゃないような気がします。

もう一つ、共生の名のもとで黙認される排除。これは、多文化共生の施策のなかでなかなか出てこないのですが、例えば僕なんかが、今、いちばんドキドキするのはヘイトです。僕だけじゃなくて、障害者の人もそうだと思います。神奈川では、障害者の施設で、「障害者は死んだほうが家族は幸せ」と言って無差別殺人が起きました。神奈川でもその傷の記憶が今も生々しく残っている。外国人だけではなくて、誰かを排除するというマインドが膨れ上がっているのは一体なぜなのか。さっきの憎悪とつながるということの分岐ですけれども、僕らが「多文化共生」を語ると同時に、「わたしだって可愛そう」という言葉をはく人間がそれと知らず佇んでいる分岐がある、ということを考えなくてはならないと思っています。

これはKFCがまとめられた報告書で、まとめ方すごいなと思いました。国籍別で出て来るのが通常のあり方

です。あるいは年齢とか。でも、この分け方は、住民の在り方、その住民たちから声を聞く際の、大事な切り口として考え抜かれて用いられてるなと感じたんですね。

これ、僕が住んでる川崎というまちです。安保法制が通ったときに、在日コリアンのおばあさんたちを中心に、ペルーのおばあさんも、ブラジルのおばあさんも一緒に、反対するデモをしました。たった数百メートルですけれど、戦争は絶対よくないというアピールをしたんですね。でも、このことが新聞に載ったことで、SNS上で炎上するんです。炎上だけじゃなくて、このまちにヘイトのデモがやって来ることになってしまったのです。もう10年近く前ですけれど。ヘイトデモがまちへ来る、本当にここからデモ隊が入ってきちゃうと、生活圏が危うくなるという切迫した感じでした。その瞬間、若者たちがこうやって阻止したんです。この若者たち、ほとんどが多分、日本の人だと思います。僕も横たわろうとしたのだけど、「お年寄りは」と言われてしまって、「くそっ」と思ったんですけど。でも、このことを僕はすごく誇りに思います。こういうふうに、人の痛みを自分の痛みのように感じられるという感性、僕はそれがすごく大事だし、多文化共生と言うときに、こういうイメージがあまり浮かばないのはなぜだろうと正直思います。KFCの報告書のなかでも、そういう記述がちょっとあったような気がするんですけれども。多文化共生と反ヘイトがなぜ結びつかないのか。ヘイトなんてないのだったらいいのですが、現にヘイト現象が起きているときに、「多文化共生」のイメージのなかに、「ヘイトに抗う」というイメージがなぜ刻まれないのか。そのことは問うべきだと僕は思います。

さて、さっき申し上げましたように、「外国人が入ってくる」、「外国人が増えた」という言説はひじょうに多く語られます。ところが、田中宏さんという一橋大学の先生には、「日本に住む人間は、外から入ってくる者だけをいつも意識してしまうが、『出の歴史』だってあるではないか。そっちも同時に見ないといけない。だって人間というのは大体、困ったときに、自分の生まれ育ったところから離れるという経験をどの国も持ってるんだ」とい教えられたことがあります。実はこういう統計があるんです。明治以来、日本から海外に行った人たち人数の統計です。1945年は資料が散逸してないそうです。でもオーダーとして250万を超えています。戦後移民もありますから。そうすると、今の290万という外国人数と大体似たようなオーダーになると思うんです。つまり、この地に入ってくる人だけではなくて、この地の歴史には、この地から出ていった人たちの歴史もあるんだということ。そのことを同時に考えることは、多文化共生を語るときにすごく大事だと思うんです。「どうやって受け入れるか」ということを考えると同時に、その前史として、我々につながる人たち、この地につながる人たちが出ていった、その歴史が一体何だったのか。これはやっぱり大事なポイントだと思うんですね。

日本からの海外移民は国策でした。「さあ行こう、一家を挙げて南米へ」。一家を挙げてと書いてありますが、実は近代化が進んで、工業化が進むと農村は疲弊しますよね。そうすると農家の次男、三男は食いぶちがなくなるわけです。それで国策で、「1人の移民は3人の食いぶちを生む」というスローガンが掲げられた。そうやって、国策としてどんどん送り出された移民たち、特に初期移民は、今も暗躍しているブローカーにだまされて悲惨な目に遭っています。明治初期にハワイに行った人たちのある一行は、43人で行ったんだけれど、3か月か4か月したら、「もういい、方法わかったから、もう帰れ。この間、君たちをケアしたんだから、帰り

の運賃は自分たちで工面するように」なんていうことを言われて、何人かは自死し、何人かは必死に生き抜いて、帰ってきたのは、結局半分ぐらいだった。そんなような報告がたくさん残っています。

これ、JICA の海外移住資料館が横浜にあって、そこの資料なんですけれども。これが初期移民の住居です、ハワイですね。そんなに裕福じゃない。かなり苦労したことが想像できます。これ、番号、サトウキビ畑などの労働者として働くときにつけられた番号(バンゴー)ですね。名前じゃなくて番号で呼ばれる。日系人たちは、これはクリスマスの風景ですが、要するに教会を建てたりしているんです。移民先で自分のコミュニティを守る、自分たちが大事にしてきた教会を造る。これは日曜学校ですね。これは本願寺、お寺ですね。ハワイに故郷にあったお寺を造っているわけです。これは出雲大社、あらゆるもの、精神的な支柱になり得るものを全部持ちこんで大事にしている姿がここに見られます。日本に来る外国人たちも同じようにそういうことをやっているのではないでしょうか。どの国のどの人も、移住先で自分が持っているものを大事にするということはあったのではないでしょうか。これは日本人小学校ですね、移民たちは必ず学校も建てた。

これはひじょうに複雑なことですけれど、日露戦争が起きたときに移民の一世は、日本人だというアイデンティティーが強いから、日露戦争に出兵するんですよ。日本人として。移民なのに日本人として出兵する、こういうことが初期には起きている。第 1 次世界大戦のときにも日本人として出兵する。でもすでにアメリカ人でもあるわけで、写真では星条旗と日章旗がかぶさっています。

これは日系人がストライキを起こしたことに関する記録です。サトウキビ畑とか、いろんなところで労働者として抑圧されたから、冗談じゃないと言って意見を述べたんですね。そしたら、これ、サンデー・アドバタイザーという新聞ですけど、上から目線で書かれてますね。「こいつら」みたいな神経を感じます。日系人たちは、自分たちの労働権を守るために結構頑張った。これもあまり知られてないことかもしれません。ところが、このことに現地のアメリカ社会は、「これが我々の旗と言うのだろうか」という社説を出しているんですね。つまり移民はそういう形で眼差されてしまう。これは、第 2 次世界大戦が起きた後のロサンゼルスのある日系人の家です。まさにヘイトスピーチ、ヘイトクライムですね。“No Japs wanted”「日本人お断り」、ニュアンスとしては「出ていけ」という感じです。でも、ここに写っているお父さん、けなげですね。崩れないように頑張っている姿が伝わってくるようです。彼はこのとき、どんな気持ちだったろう、と思うんです。

さて、戦争になると、移民は、「おまえはどちらの側なんだ」と問われることになります。一番極端にそのように問われるのが戦争ですよね。日常でも「どっちなんだ」と問われることがあるけど、最も如実に問われるのは戦争じゃないかしら。実は、日米が開戦したときに、日系人は敵国の人間になったわけですよね。だから財産没収された。よくご存じのように。これはアーカンサスというところですけれども。このように寒いところ、何もないところにキャンプがつくられて、そこに強制収容される。財産も全部没収されるなんていうことが起きた。このとき、家庭内で分裂が起きるのです。一方で、日本人として出征するみたいな一世がいた。ところが二世、もうこの地で生まれて育っていて、青年になった二世は、自分はアメリカンだと思っている。ここでアイデンティティーの分断が生じるわけですよね。二世たちは、自分たちはアメリカ人から、アメリカのソルジャーとして出兵するんだと言う。ほかのエスニシティーを持っている人たちよりも多くの日系人が、

実は、志願してしまう。ご存じのように黒人とか、マイノリティは一番ひどいところに送られる。権力の狡猾さはこういうところに露骨にあらわれる。一番、活躍した二世たち。戦後、狡猾な憎しみによって造られたこの分断を、どうしたら人と人をつなげる方向に向かう力に変えられるか。日系人の家族のなかで起きたような分断は、今も、僕らの社会のなかで起きているのかもしれません。人と人の間に起きる分断ではなく、人と人をつなぐというイメージをどのように育んでいこうか、というお話をこれからします、あと15分。

redress という言葉があります。これは1990年代にアメリカやカナダですごくはやった言葉です。日本では人権運動のなかで「戦後補償」の運動と言われました。戦争のときに傷ついた人たちが補償を受けていない。この運動は、もともとアメリカやカナダから始まったものでした。redress というのは多分、re－adress、もう一度書き記す。要するに、例えば強制連行されたり、財産没収されたり、強制移住させられたりした経験が、アメリカの正史のなかで、正義として語られたり、被害の痛みが忘却されたりする。redress というのは、本当にそれでいいのかという異議申立てなんです。つまり、一旦書かれた歴史をもう一度書き記す。人々の痛みの記憶が黒塗りされてしまった記録を、もう一度書き直す。そういう意味があります。これを実は日系人たちがおこなったのです。「あれはおかしいじゃないか」、「国家が我々に謝罪すべきじゃないか」、「我々は国家のために命をささげたではないか」。この論理自体、僕はすみからすみまで好きになれませんが、実はその結果、レーガン大統領が日系人に公式に謝罪しました。そして補償金も支払いました。同時に、ロサンゼルスにナショナルミュージアムを造ったのです。Japanese American National Museum。これはものすごい大きい建物で、そのキュレーターの人と知り合いになって、ある展示会のパンフレットもらいました。Bento to Mixed Plate といいます。ここにハワイでの出来事が記録されています。日系人の人たちはサトウキビ畑で働いている。日本人だから弁当を食べる。でも、そのサトウキビ畑にはポーランド、イタリア、中国、韓国、いろいろところから人が来ていた。あるときに、お昼の時間に、ちょっとずつ食べ物を分かち合うようなことが起きたんだそうです。持たざる者が、なけなしの何かを持ち寄って分かち合うということ。最初はエスニシティーグループごとに食べてていたのだけれど、何かのきっかけで「国境」を越えてちょっとずつ分かち合うようなことになった。それが今、僕たちがデニーズとかで見ている「ミックスプレート」の起源なんですって。ミックスプレートの原形はこのときに生まれたんだって僕は習いました。

サトウキビ畑で番号で呼ばれて、どちらかかというと、虐げられて、どちらかというと幸せじゃない、苦労が多い、そういう労働者たちが、なけなしのおかずを分かち合うということの経験。一方で、「おまえはどっちなんだ」というふうに突きつけるような時代のベクトル。この2つのベクトルは全く違う方向ですよね。労働者たちはなけなしのものを分け与えながら、分かち合いながら、何かつながりみたいなものをそこで生み出していたのではないかと思うのです。文化と言うとき、何か軽く考えられるかもしれないけれど、「たたかいの結果」といえるのだとしたら、過酷な労働とたたかいながら、分かち合うなかでひとつの尊い「文化」を生んだというのも事実だと思うんですね。人間はそっちにも行ける。「おまえはどっちなんだ」と言って、「帰れ」とかって言うこともできる。僕たちもこういう分岐、違う質かもしれないけれど、そういうところに今、立っているのかもしれないです。

さっきのヘイトデモに関連するエピソードですけれど、日系ペルー人のおばあさんが、在日コリアンのおばあさんたちとの交流会に参加しました。突然来て、在日のおばあさんたちは、それこそ、誰?みたいな感じで。ちょっと分かるでしょう?「何、何しに来た?」みたいな。日本語もそんなに分からないのに、「私、友達なりたいね」とそのペルー人のおばあさんは言う。「はあ?」という、在日のおばあさんたちの反応。苦労してきた人にも時折にじみ出るちょっと排他的なところ。だけれど、その大城さんという日系ペルー人のおばあさんが突然、カラオケのマイクをとって、「私、歌うね」と言って「ベサメムーチョ」という曲を歌った。「ベサメムーチョ」って古い歌で世界的に有名な歌なので、おばあさんたちも知っている。大城さんは、格好よく、ラテン系の踊りを踊りながら歌ったもんだから、突然ヒロインになっちゃった。「うわっ、あんた、いいね、いいね」って。人間の評価の基準ってどこにあるのでしょうか。いいね、そして、気がつくと互いに友達になっているのです。それ以来、大城さんはずっと通い続けた。陰口とか小さな意地悪がなかったわけではないけれど、基本的には仲間になった。

先ほど紹介した戦争反対のデモのあとにヘイトデモが来て、在日のおばあさんたちは、「殺せ」とか言われることになってしまった。大城正子さんはそのことを聞いて、ある作文を書いたんです。彼女はペルーで日系人学校に通っていたけれど、戦争になって、日本が敵国になった関係で学校は閉鎖されますね。そのことも思い出しながら、こういう作文を書いてます。日本人の日本人学校は閉鎖されます。仕方なくペルー人の学校に行ったら、「Chino、目が小さいことをからかう言葉(多分チャイニーズのことじゃないかと思うんだけれど)ここはおまえの国の学校じゃないと言われた。畑を取られて、お父さんが人の畑で働いていたら(多分、小作に転落したんでしょうね)、畑の中を通る人がいて、お父さんは、そこは道じゃないよと言ったら、ここはおまえの国じゃない、どこでも道だと言われた。あなたの国に行きなさい(これ、丁寧に言われてるけれど、日本語回復してる人ですからこういうふうな表現になるんでしょうね。もうちょっと汚い言葉だったと思いますけど)。戦争が終わってから、日本は負けたんだから帰れといつも言われました。そのとき、さみしかった。トラヂ会(トラヂの会というのはさっき言ったお年寄りの交わりの会です)ウリマダン(識字の会です)の友達が朝鮮に帰れ、死ね、殺してやると言われたらどんなに悲しいか、私はよく分かります。」僕、いつも読むたびに、何か心がいい意味で揺れるんです。なぜかというと、大城さんが経験した痛みは、在日コリアンのおばあさんたちが経験してきて、今、ヘイトに遭って経験してる、その痛みとは違う痛みです。でも、「自分とは違う痛みがこの世の中にあるんだ」という、その想像力。その想像力によって人間は結び合うことができる。僕はそのことを、そんな言葉は使わずに、大城さんは自分の体全体から湧き出てくる記憶を通して表現したんだと思うんですね。

さっき、ある大学生が、「私だってかわいそう」とつぶやいたお話をしました。これ、何となく想像つきませんか。この社会に生きていて誰でも不安です。どんなに一流と言われる大学にいたって、明日どうなるか分からない。「私」だって苦労がある、「私」だってかわいそうです。外国人だけがかわいそうじゃないという意見、何か分かるような気がします。そう、分かるというのは、つまりそういう発言が出てくるのが、ああ、さもありなんと思えるという意味です。でも、学生の「わたしだって可愛そうなんです」という感覚と、大城正

子さんの感覚の違うところは、「私だってかわいそうで、あんたたちのことなんかより私のほうが大事」というふうに関心をそっちの方向に回収してしまうのか。そうではなくて、「私が経験したのとは違う痛みがこの世界にあって、その違う痛みに対して、私は共感ができる」という方向に向かうのか。誰にもこの分岐は訪れ得ると僕は思うんです。その大学生を「駄目じゃん」とか言うのは簡単なんだけれど、じゃあ、人間はそうじゃない方向にどうしたら舵を切れるのか。そのことが僕、今、現代社会で全ての人が問われていることではないかと思うんです。

「共感」は、特に社会学の人たちからは評判悪いです。なぜか。例えば、「殺せ」という共感もあり得るからです。でも、例えば“sympathy”という言葉、分解するとこうなんですね。“sym”というのはsymmetryとかsynchronizedとかと一緒で、同じという意味です。この“pathy”は“pathos”のことで、痛みという意味があります。だから“sympathy”は、同情、共感と訳されるけれど、ギリシャ語起源の言葉で「痛みを同じくする」という意味の言葉です。あなたの痛みと私の痛みは違うんだけれど、しかし、さっきの大城さんと同じように、違う痛みなんだけれど、それがなぜか私に伝わってくる。このことを説明するために、僕は、例えとして音叉をいつも思い描くんです。二つ音叉がある場合、一方が振動すると、ほどなくもう一方も震え出すでしょう。ぼくらが「共感」というのもそういうことじゃないか。つまり、ある人の痛みによる震えが、私の「痛みのセンサー」のようなものが生きてたときに、振動が伝わってきて、私も知らない間に震えている。これを現代思想のなかでは「共振」と訳す人もいます。「共に振動する」。いい訳だと思いますけど、これこそが共感の中身ではないかと僕は思うんです。共感には仲良しだけが集まって、誰かの排除に向かう悪い共感もあるじゃないか、との批判はごもっともなんですけど、じゃあ、本当に「痛み」を共有するような共感を抜きにした上で、「痛み」を媒介にした、人と人の連なりをどのように構想できるのか、僕はそのことは問いたいと思います。多文化共生と言うときの根幹にあるべきなのは、このような「共感」ではないか、「痛みへの共振」ではないか。僕はそう思います。

さて、どんな会社も、商品を売るときに需要をリサーチしますよね。でも、多文化共生業界はしているかというと、僕が交流協会にいたときにもあまりしていなかったです。今思い起こすと、企画書の趣旨書くときに、「何々の実践が求められている」とか書いていたのね。でも「こういうことが求められている」って、誰が言ったんだろう。当時、「神奈川県」という現場があまりない中2階みたいところで企画を考えていた私は、すごくスキップしながら仕事をしていたな、と今、思うんです。「需要」はどういうふうに把握されたのか、あるいはされなかったのか。KFCの報告書は丁寧に、「ここが届いてない。ここが実は必要だと思うんだけれど、しかし、届くべきところに到達していない」。そういう大事な指摘が記されていたと思います。

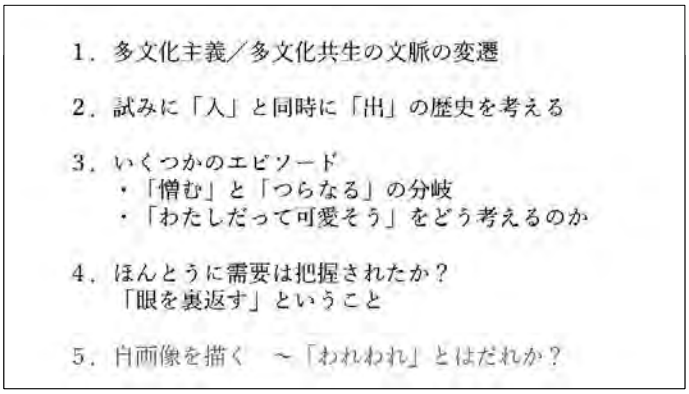
これは東京外語大で研究したときに書いたものなのです。日常生活って、法制度、言説、日常というふうに3つのレベルに分けられるだろうってある社会学者の人に教わったことがあるんですが、多文化共生の施策をするときに、大体、条例などのシステムをつくろうとかイメージしますよね。それは大事なことです。そのために事業の提案を書きます。いっぱい書く、それは恥ずかしいことじゃないし、悪いことじゃない。必要なことです。でも、その「必要／需要」はどこから来たのか。鉛筆なめなめ、「これ書いときゃいいんじゃない?」

とか、「上司に褒められちゃった」と、満足していた僕がいましたが、そういうことじゃない。圧倒的にここにいる当事者の声、当事者の生活との結びつきのなかで「需要」を抽出すべきですよね。そのことが多くの場合、スキップされていないでしょうか。今日、このKFCがつくられた報告書はそこにタッチしてるので、僕は、すごいことだと思いました。

もう一つ、企画・事業そのもの、もしくはデザインを、当事者の人と一緒につくってること。これ、すごく大事なことだと思います。大体、ホストの側は外国人をゲストとみなして、その人たちを助けようとします。これは大事なことだし、必要なことでもあるのですが、しかし、その人たちと「一緒に仕事をする」ことが、ややもすると欠けていないでしょうか。僕の神奈川での経験では、大いに欠けていた。いつもゲストとして呼び、意見を聞くのだけれど、それを加工し事業にするのはこちら側。そうではなくて、プロジェクト自体を一緒につくるという、そういう発想が必要なのに、そこがどうしても欠ける。そんな気がします。

最後に、これも東京外語大でつくったものなのですが、さっき、常務がおっしゃったこととほぼ一緒です。「目を裏返す」ということをちょっと発想したんですけれど、これはある自治体の職員の目です。自分が中心にいます。どんどん離れて外縁に行くほど関係の薄い人です。国際交流協会は、この図ではちょっと近いんですが、何かけんかすると突然ぽんと遠くに追いやられる……。だからこれは固定されたものではありません。でも、こうやって見ると、民族団体の代表とか、キーパーソンとか、さっきも出たエスニックメディアとか、レストランとか、外国人にとって一番近しいところがこの職員にとっては一番遠いところに居続けられています。普段はあまり意識されない。当事者の外国人住民からしたら、図は反転します。全く逆で、エスニックコミュニティとか、キーパーソンとか、もちろん一番近くにいるでしょう。教会だったり、寺院だったり、民族団体の代表だったり、エスニックメディアだったり、レストラン、近いのですよ。ところが大事な自治体の人とか、国際交流協会とか、当事者からは、うんと外の方にいる。これ、日常的な風景じゃないかしら。このことを意識して、裏返す。このことは、さきほど、「人をつなぐという役割」とおっしゃったことと同じです。自分の認識にあぐらをかかずに、まずは、自分の目を疑って裏返してみる。そこで何が必要かということを考えてみる。そのことは、多文化共生という言葉が変遷していて、今、いろいろ分断の中にあるときにこそ、より大事なことなのではないでしょうか。私たちは一体、どういうふうにこの社会を見ているのか、外国人と一緒に何をしようとしているのか、そのことを考えることが今、とても求められてると思います。

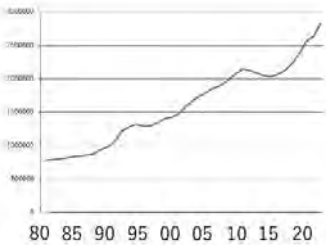
時間になりました。終わります。



1．多文化主義／多文化共生の文脈の変遷

全国の在日外国籍住民の数

約２９３万人
（2023年6月末　法務省統計）




多文化主義 ＋ 共に生きる

1991年に使いはじめられたらしい

*風巻浩「世界と出会う高校生」『歴史地理教育No.479』歴史教育者協議会、1991年11月号、32頁。

1977年
ホームステイ

国際交流

1977年
ポーランドウィーク

国際交流

1988年
インド写真展

国際交流
アジア重視

1992年
「ことばのちず」発行

内なる国際化

1992年
オーストラリア
スタディツアー

多文化主義

多文化主義施策の変遷

- ９０年代～２０００年の福祉多文化主義／公定多文化主義
  - ・経済・社会的な公正さ＋自己決定や文化的差異の承認
    ＝「多文化的シチズンシップ」の承認
- ２０００年～現在：グローバリズムの進展による変容
  - ・「多文化主義の失敗」？
  - ・エスニック・マイノリティの権利保障とナショナルな
    シチズンシップの両立
  - ・マジョリティと移民が経験するリアリティの分断

塩原良和「多文化主義/多文化共生の変容とオルタナティブの模索」
『岩波講座 社会学 第3巻 宗教・エスニシティ』岩波書店、
2024年、109-128頁。

・グローバリズムの進展による多文化主義の変質に関するカナダやオーストラリアにおける諸研究においては、「自己責任」により「自己啓発」に努めて企業活動に参加できる「高度外国人材(グローバル・マルチカルチュラル・ミドルクラス(GMMC))」は、「超市民」として位置づけられるのに対し、社会の下層に留められる移住労働者は「二級市民」「半市民」「非市民」として扱われていることが分析されている。

・日常的に深い次元で人間に起きていることは人間の「ホモ・エコノミクス」化。→経済的な「有用性」で人を評価する尺度の般化への疑義（以上、塩原）。

・「企業」というシステムの一般化、個人は虐げられた主体ではなく、不断に自分を改造・改革する「プロジェクト」と考える

（スラヴォイ・ジジェク「パンデミック1 2020、Pヴァイン、18-19頁）。

自由とはなにか？ －「選択の自由」ということ－

①大手のA社は、安定感はあるが、業務がきついことで有名だ
②老舗のB社は、家庭的で雰囲気は良いが、給料が安く、先細りが懸念される
③ベンチャーのC社は、将来飛躍する可能性はあるが、リスクも大きい。
④外資系のD社は、好条件だが、入社試験が厳しく、解雇もされやすい。

・選択の自由
・操作的介入　←　産業化を促進するための重要な条件であると同時に
・短期的報酬　　アディクションともつながっている

鈴木宣「アディクションと資本主義」みすず書房、2023年、89-96

日本においては？

■２０２０年まで。
「地域における多文化共生」「生活者としての外国人」

■２０２０年以降の「地方創生施策」の影響
・特定技能をもつ「高度人材」の受け入れ
・「外国人材を適正に受け入れ、共生社会の実現を図ることにより、日本人と外国人が安心して安全に暮らせる社会」
>>「地域における多文化共生」

①「住民」の視点が薄れ、日本人／外国人の二分法が固定化される
②「国益」優先の外国人選別受け入れの姿勢が強まる
③「共生」の名のもとで黙認される「排除」

留学生

在日コリアン

移住家庭若年層

中国残留邦人帰国者ら

技能実習生

結婚移住者

異なる移住背景を持つ６つの当事者グループ
『実態報告書』2023年、KFC

２．試みに「入」と同時に「出」の歴史を考える

| | 在朝鮮日本人 | 在台湾日本人 | 在外邦人 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 1900年 | 15,829 | | | |
| 1905年 | 42,460 | 53,515 | **188,591 | 284,566 |
| 1910年 | 171,543 | 68,248 | 275,746 | 515,338 |
| 1915年 | 208,846 | 137,229 | 302,828 | 652,921 |
| 1920年 | 341,850 | 168,621 | 541,784 | 1,056,255 |
| 1925年 | 403,402 | 185,632 | 615,429 | 1,204,461 |
| 1930年 | 527,016 | 232,299 | 740,774 | 1,500,089 |
| 1935年 | 619,009 | 299,799 | 1,149,492 | 2,068,300 |
| 1940年 | 707,740 | 346,653 | **1,421,156 | 2,475,561 |
| 1945年 | 717,583 | *937,000 | | - |

*1：注1904年、**注1938年、*注1943年の数字。　注不明。
出典：在朝鮮日本人数は、森田芳夫『朝鮮終戦の記録』（巌南堂、1964年）
在台湾日本人数は、台湾省行政長官公署統計室『台湾省51年来統計概要』（台北、1946年）
在外邦人数は外務省『海外在留邦人数調査統計』（1988年）

田中宏『在日外国人　新版』岩波新書、1995年、211頁より転載

Japanese homes, Waiakiu Island, Hawaii, ca.1890

ISSEI PIONEERS — HAWAI AND THE MAINLAND 1885-1924 — (Japanese)

American National Museum, 1992

アイエア教会の日曜学校　オアフ島　1905

（上段右端が、高橋善平牧師。）

1896年に創立されたオアフ島で最初の日本人小学校　ホノルル 1896
（原村コレクション）

日露戦争に出征するため　ヒロで乗船する日本人予備兵
ハワイ島　1904～1906

1894年、最初の官費移民募集にあたっては徴兵年齢の若者は除外された。しかしその後、ハワイにはロシア帝国の兵士たちがいた。日清戦争（1894－1895）、日露戦争（1904－1905）が起こった時、彼らは日本の軍隊に徴兵した。

Roland Kotani, "The Japanese in Hawaii: A Century of Struggle", The Hawaii Hochi, Ltd. 1985

Winter barracks in an Arkansas concentration camp.

Roland Kotani, *"The Japanese in Hawaii: A Century of Struggl*

Chapter 7

THE NISEI SOLDIER

AMERICA

Roland Kotani,
*"The Japanese in Hawaii: A Century of Struggle"*,
The Hawaii Hochi, Ltd, 1985

3．いくつかのエピソード
・「憎む」と「つらなる」の分岐
・「わたしだって可愛そう」をどう考えるのか

redress　　戦後補償？

sympathy

sym + pathos

4．ほんとうに需要は把握されたか？
「眼を裏返す」ということ

留学生

在日コリアン

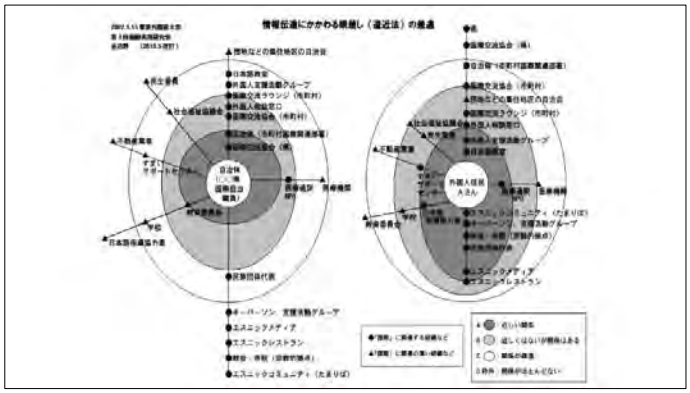
移住家庭若年層

中国残留邦人帰国者ら

技能実習生

結婚移住者

異なる移住背景を持つ6つの当事者グループ
「実態報告書」2023年、KFC




## 画像資料典拠

- ・Roland Kotani *The Japanese in Hawaii: A Century of Struggle* The Hawaii Hochi,Ltd. 1985
- ・Akemi Kikumura, *ISSEI PINONEERS: HAWAII AND THE MAINLAND 1885-1924*, Japanese American National Museum. 1992
- ・*From Bento to MIXED PLATE*, Japanese American National Museum. 1997

③話題提供　「響き合う『多文化共生』の実現をめざして」

山野上隆史氏、山根絵美氏、三木幸美氏（公益財団法人　とよなか国際交流協会）

○司会：話題提供「響き合う『多文化共生』の実現をして」と題しまして、とよなか国際交流協会より3名の方にお越しいただきました。どのように外国人当事者に国際交流協会が必要とされるか、認知されるような取組をしてこられたかなど、たくさんのお話をご紹介いただきたいと思っております。

では、皆様から見て向かって右手からご紹介いたします。事務局長の山野上隆史様。事業主任の山根絵美様。それから職員の三木幸美様。以上3名の方からお話を伺いたいと思います。この後は山野上さんにバトンタッチさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○山野上：皆さん、これから1時間お付き合いいただきます。よろしくお願いします。

基調講演、金迅野さんのお話をお聞きして、3人ともこんなに頭をフル回転させた休憩時間はなかったんじゃないかというぐらいに、一生懸命考えました。うまくつながればいいなと思います。今日はとよなか国際交流協会から3人来ていますが、まずはそれぞれどんな人間なのかというのを話したいと思います。この後の話を聞いていただく際に、ポジションとか立場、あるいはこれまでの経験によって、このあとに話す内容が変わってくる部分があると思うのですが、自己紹介があった方が理解しやすくなるのではないかと思いました。というわけで、最初に自己紹介をさせていただきたいと思います。

私は今、事務局長として働いていますが、もともとは日本語の先生をしていて、とよなか国際交流協会にはボランティアで関わり始めたのが最初です。それから職員の募集が出たので応募して職員になり、3年ほど働いた後、文化庁で7年ほど仕事をしていました。なので、行政の視点だとか、そういったことから国際交流協会を見つめなおすことが今度はできたのかなと思っています。8年前にとよなか国際交流協会に戻ってきて、今は事務局長という立場で事業全体のまとめですとか、あるいは対外的な交渉を担当しています。

こんな感じで順番にさらっと、自己紹介を回していきます。

○山根：こんにちは、事業主任の山根といいます。

私はもともと多文化教育とか移民への教育に関心があって、大学院に進学したんですけど、進学先の院の研究室の先輩方が軒並みここの、とよなか国際交流協会のボランティアをしていて。「私、ボランティアしようと思ってるんですけど」と言ったら、「めっちゃ面白いところがあるよ」と言われて連れていかれて、そのままボランティアになったのがきっかけです。その後、わたしもたまたま職員の募集ががあったので、ボランティアから職員になったという感じでやっています。入職とボランティアの時期も合わせると、多分もう13年ぐらいになるかなと思います。今、事業主任という形で、名ばかり中間管理職と言っているんですけれども、自分の担当業務だけでなく全体をいろいろ見ながらお仕事をしています。うちの協会、いろんな事業があるんですけれども、私が一番、誰よりもいろんな事業に関わっているんじゃないかなと思います。今、前に映し出してるんですけれども、日本語の活動であるとか、外国人のママの居場所づくりと

か、子どもの事業、若者相談サービスとか、今はメインは情報発信とか防災関係をやってるんですけれども、大体の活動を網羅して担当してきました。こんな感じでお願いします。

○三木：職員の三木です。こんにちは。

私も今、職員として働いているんですけれども、2人と違う部分でいいますと、私自身が当事者であるというところですね。母親はフィリピン人で、父親は日本人。8歳のときに日本国籍を取って、それまでは無戸籍という経緯があったんですけれども、日本国籍を取って、三木幸美という名前で生活をしてきました。

国流との関わりで言いますと、実は最初から職員というわけではなく、子ども時代にセンターを利用していた一人でした。今のとよなか国際交流センターは2010年に移転をして駅直結のビルの中にあるんですが、昔のセンターは駅から徒歩15分ぐらい、ちょっと遠いところにありまして。そこで民族舞踊の練習をしたりですとか、お祭りで発表したりということをしていました。大学生に上がるときに、子どもの居場所づくりの「サンプレイス」という事業で、ボランティアとして初めて子どもに関わる立場として入ります。その後、若者の事業にも関わり始め、若者事業のコーディネーターとして、後で話に出てくるかもしれませんが、ダンスを子どもたちと一緒にやったりもして。2010年からボランティアをして、2016年から職員として仕事をしています。

職員としては総務の仕事がメインになりますので、貸室対応とか備品関係で足りないもの買ったりとか、市民との協働の事業であったり、国流に関心を持ってもらう1歩目、その後、継続して関わり続けてもらうためにはどうしたらいいかというところを広報も含めて担当をしているところです。こんな感じでどうでしょうか。

○山野上：…という3人でお送りしたいと思います。

まずは今日来た3人の自己紹介をさせていただきましたが、ここからはとよなか国際交流協会の話です。とよなか国際交流協会では約30以上の事業をしています。関わっている市民の方、ボランティアの方、400名程度ということで、とにかく多くの市民に参加してもらって、その人たちとどういうふうに事業をつくり上げていくか。また、そこには当事者の人たちももちろんですが、どういう形で参加してもらうか。そのときにどういう形できちんと声を、できるだけ拾い上げて形にしていくかということを大事にしています。

約30の事業と申し上げましたが、大きく分けて3つの柱があります。1つ目が多言語相談サービスということで、一番左下ですけれども、多言語での相談サービス。一応、5日間対応ということでやっています。10言語です。当然、ここには多くの方から相談の声が寄せられるんですけれども、相談に対応する課題解決を目指すことと、もう一つ大きなことを大事にしていて。それは何かというと、相談に来た人たち同士をどうつなげていくかというコミュニティの取組を大事にしたいなと思っています。相談については情報提供だけで終わるものだとか、どこかにつないで終わるものももちろんあるんですけれども。そういった困り事を抱える、そこに至るまでの過程でも孤立や何かあっても聞くことができる人がいないなどの状況にある人もたくさんいます。どのようにつながりをつくるのかを大事にしています。

また、スライドの右下のところ。特に外国人のなかでも、女性とか子どもとか労働者は外国人のなかでも

やはりちょっとしんどい状況に置かれる傾向があります。子どもとか若者については、特に居場所や母語の活動など、自分のルーツを大事にしていける、大事にしていこうという環境をつくっていくことで、本人たちが自分のことを大事に思えるような取組をしています。

それから、日本語交流活動ですが、これはいわゆる地域の日本語教室です。が、子育て中の外国人のお母さんは特に孤立しがちなので、そういった方たちが参加できる場として、ボランティアも親子で参加する、ママ友づくりのような居場所の活動もしています。ほかにもいろいろあるのですが、事業の数としては全部で30ぐらいになります。

一方で、当然、とよなか国際交流協会だけではできないこともたくさんあるので、市役所ですとか社会福祉協議会ですとか、地域のボランティア、学校園、教育委員会とか、いろんなところとつながりながら、どうやって外国人と私たちがつながることができるかということも大事にしています。また、私たちのところにつながった人たちが、地域ともどうつながるかということを大事にしているところです。

私たちの役割は話題提供なのですが、さきほどの基調講演を受けて、一生懸命考えたのですが地域の多文化共生について、改めてどの立場から、誰の視点から、何を大事にするのかということを一度立ち止まって考えないといけないということが問われたのかなと思いました。すごく響きのいい、何となく一般社会にすっと理解してもらえるような響きのいい「多文化共生」にそのまま乗っちゃって大丈夫なのかなということが改めて問われたのかなと。「自分たちが大事にしたい」、「関わっていきたい」、「この人たちの声を殺したらあかんの違うか」という当事者の存在が本当にどこまで考えられているのか。そこを出発点に思いや実際の活動をつなげていったり、重ねていったりすることで、地道に多文化共生、地域での取組をつくってこれているか。「多文化共生」に取り組む基本的なスタンスというか、哲学というか、そこの部分がすごく問われたのかなと思っています。

今日、スライドに用意してないんですけれども、基調講演を聞いて皆さんに紹介したいなと思ったことがあります。年度末は、事業の振り返りのタイミングなんですけれども、とよなか国際交流協会では同じ視点で、全ての事業を振り返るということをやっています。そのときの視点が4つです。1つは居場所の視点です。本当に安心して集うことができる、ただ、いることができる、何か目的がなくてもそこに存在できる場所が本当につくれているのかということが1つ目の視点です。

2つ目がエンパワーメントです。エンパワーメントも、人によっていろいろ解釈というか、違う部分があるのかなと思うのですが。何か力をつけるというよりかは、そもそも持っていたはずだけれども、日本の環境のなかで発揮できない、あるいは発揮してはいけないと思わされているようなものがないか。それがちゃんと出せるような場ができているかなということが2つ目のエンパワーメントです。

3つ目がボトムアップの組織づくり。多くの市民の人たちが参加していく。それは多分、グローバル経済の中の規範に基づいてということではなくて、参加している人たちの一人ひとりの感じていることであったり、こんなことを大事にしていこうという声をベースに活動が運営できる形ができているかどうか。すごくまどろっこしいし、手間もかかるし、ちゃっちゃと決めてくださいと言われることもあるんですけれ

ども、「いや、これはもう話をしましょう」ということで、ボトムアップの組織づくりを進めています。

そして最後が双方向性ですね。思いであったり、価値観であったり、考え方であったりだとかが片方から片方に流れるという形だけになってないかというところを大事にしながら振り返りをしているところです。

今のは、あくまで振り返りの視点ということで、ちょっと抽象的な話になってしまいましたが、今日の3人は担当事業や仕事の内容もそれぞれで協会事業への関わり方も違うのですが、この後はできる限り具体的なエピソードであったりですとか、事業だとかを紹介しながら、とよなか国際交流協会はどんなことを考えているのかとか、普段どんなことをしているのかを伝えていけたらなと思います。

とにかく基調講演を聞いて、今日はとよなか国際交流協会の事業を一から順に紹介するような形ではなく、「私はこれを紹介したい」「私はこれを話したい」と思ったことから、つないでいこうと決めました。ということで、ここから順番にマイクを回していきます。当事者、どう関わるか、どう参加するか、どう拾うかというところから、こんなことをやっています、こんなエピソードありましたということを紹介したいと思います。

いいですか。どっちからいきますか。マイク取ったので、はい、いきましょう。

○三木：いや、上司2人の前なんで、しゃべりにくいですが、金迅野さんのお話を聞いた後なので、金迅野さんに応答する形で始めたいと思います。私は今、当事者としてスタッフをしているので、当事者として仕事にどう向き合っているかというところから、後に事業を紹介できたらなと思ってるんですけど。

私が最初国流に、大学生になって関わる前は、本当に自分の味方が自分しかいないと感じる状態がすごく長かったんですね。生まれ育ったところが被差別部落の地域なので、人権に関わることや取組はやってきたところだったんです。ただ、味方の顔した敵みたいな人も意外といて。「あなた大変でしょう、居場所を与えてあげるわね」みたいな。そういう構造的な力関係のなかで自分を評価されるような形での居場所に出会ったときに、この手を払いのけていいのか、ありがとうと言ったほうがいいのか、どうしたらいいんだろうという戸惑いを感じることも結構あったんです。

なので、自分が仕事として関わるときに、評価の前にまず味方として一緒にいるスタンスをどうつくっていくかというのは、今、ものすごく大事にしてますし、同時に迷いがあるところでもあります。やっぱり世代間の格差も大きくて。例えば親とも世代間格差みたいなのがあって、割と親も一世で「頑張らなあかん、負けたらあかん、差別されたものははね返さなあかん」みたいなタイプだったんです。そこから二世になってくると、とはいえそれだけではやっていかれへんし、「負けたらあかん」が何に勝つことを指すのかがいまいち具体的に分からないという期間もすごく長かったんです。だから、自分がボランティアとして関わるときも、職員として関わるときも、正しいと思うものはもちろん自分の中にあるんですけれども、そこに導く形ではない。居場所も与えるじゃなくて、自分がつくっていくんだという意識がその場で生まれるまで待たなければならないのが職員としての関わりかなと。例えば、大人として子どもに関わるときにもそうなんですけれども。そういう意味での待つ力というような、忍耐みたいなところは8年間、職員として働いて8年なんですけど、すごく意識してきた部分でもありました。

特に忍耐というものがついたなと思うのは、市民の方との関わりというところでした。国際交流フェスタって年に１回のお祭りが、全館挙げてのお祭りがありまして、そのなかで中心になるのは市民グループの方たちなんですよね。もちろん30年以上、国流ができる前からずっと国際交流の活動に関わり続けてきた方たちなので、大先輩ではあるんですけれども、多文化共生に対する思いやスタンス、考えはさまざまなんです。外国人へのまなざしも、同じ人を見るときのまなざしも違うなかで、どういうふうにお互いの力を持ち寄ることができるか。それは多分、先ほどの金迅野さんの分岐点というか、かじ取りをしていくところに近いのかなと思うんですけれども。それは今の状態こうなってますから、こうですよねという形ではなく、現時点でこう思っているというのをとにかく出し合うところから続きを考えるべきなんだなということはすごく意識するようになりました。

8年担当していて、すごいアイデアが8年かけてめっちゃ生まれるようになったんですよね。フェスタの会議に参加するメンバーは変わってないんです。でも初年度は、本当に私、会議が終わったら泣きそうな状態で、「また今日も何か怒られました」みたいなことを言いながら泣きついてた。というのも市民としては多分、多文化共生って何なのかという思いもあったでしょうし、とよなか国際交流協会が考えていることをやらないといけないのかといった気持ちで職員の話を聞いてる側面もあったと思います。そうじゃなくて、私たちは仕事として支援をしているが、市民として生活をしている人たちは、生活の場で外国人と接する。だから、「私たちは外国人が生活するなかでこういうのがあるというのを聞いてます。国流は、それってこういうふうに見ることもできるかもしれないですよ、ああ見ることもできるかもしれないですよ」と提案をすることができる。塗り足しをしながら、ちょっとずつ8年かけて、じゃあ外国人が元気になるとか、エンパワーメントとか、居場所、外国人がつくるというのを一体的につくりましょうというふうに、そこは一番時間をかけて頑張ってこれたかなというところと、当事者としての思いを乗せてやってこられたかなと思う部分ではあります。

すみません、しゃべり過ぎましたね。というところです。

○山根：私自身は、今の話も受けてだったりするんですけど、居場所の中からどうやって当事者の声を拾っていくかみたいな話をさせていただこうかなと思っています。国際交流協会の事業、今、30 あると言っていたんですけど、最初から30あったわけじゃないんですね。やっぱりちょっとずつ時代の流れとニーズのなかで増えていっている部分があるんです。その増え方が割と、私たちの独特な部分なのかなと思うんですけど、ボトムアップで増えていくことが結構多いんですね。もちろん相談から増えることもあるんです。例えば、相談を受けたなかで増えてきた事業の１つは、若者の事業だったりします。それまでは子どもの事業があったんです。でも、子どもの活動って参加する子どもたちは大体中学生ぐらいまでなんですね。いっぽうで日本語の活動は大体、よく来るのは大人の世代で、相談は困り事が明確にないと来ない感じだったんです。

10年ちょっと前ぐらいから、ネパールの若い子たちがすごい増えてきて、その子たちって大体16～17歳ぐらいで日本に来てるんです。その年齢だと中学校には入れないので、まず高校入学とか目指すんですが、そこで日本語を学ぼうとして、日本語の活動に行っても、周りは年上の人たちばっかりなんですよ。ボラン

ティアも何ならおじいちゃん、おばあちゃん世代の方も多くて。自分と同じ世代がいない。そこで子どもの事業に行ってみても、皆自分より年齢が下の小さい子たちばっかりなんですよ。そうなると、どの事業に参加しても何となく居場所がないなと。そういう、ちょっと若い子たちが増えてきた。それであるとき、この子たちの居場所ないよねと、ふっと気付くんです。やっぱり若い子たちの場所がいるよね、必要だよね・・・ということで若者の事業を新たに始めました。若者の事業を新しくつくるにあたって、誰に関わってもらおうかなと考えたときに、ああ、若者がおったわと言って、今職員になっている三木にダンスの講師として来てもらってというような感じで活動を展開していきました。

そういった形で、既存の事業や相談に来てる人たちの中から、これが足りてない、支援からこぼれ落ちている人がいることに気付くと、そこに新しいものをつくっていくわけなんですね。でも、それすると、事業が増え続けて、めっちゃしんどくなることもあります。「誰か、どこかでとめてくれ」とか思うんですけど。そんな感じの事業の増え方もあれば、こんなパターンもあります。例えば今、ダンスの話をしましたけれども、ダンス教室をやるようになったのは相談があったからではないんですね。実は、これは子どものつぶやきから生まれた活動なんです。私たちは、活動の中のつぶやきを拾うことをとても大事にしてるんですね。相談に来る人は、困り事を自分で認識しているから来るんですけど、もうめちゃくちゃ困っている人の本当の困りごととか、本当はこんなことやってみたいっていう本心には人の前で相談したりしゃべったりするのが難しいことって、たくさんあるんです。そうしたものが、ある時、思いがけないタイミングでこぼれ落ちてくることがあるんです。なので、居場所の活動のなかでは、私自身がボランティアの時もそうだったんですけど、ボランティアに対してずっと「子どものつぶやきを大事にしよう」と職員は伝えて続けています。

ある日、これもまたフィリピンルーツの子どもだったんですけど、「ダンスしたいな」とポロっと言うんですよ。ダンスがしたいな、でも金銭的なことだったりとか、いろいろあってダンスを習うことができない。そのつぶやきを聞いて、活動のなかでボランティアたちと“その子のダンスしたいという気持ちを大事にしよう”という話になり、一度イベントで踊ってみようと言って、ボランティアと一緒に練習してダンス発表をする場をつくったんです。でも、発表当日、その子は踊れなかったんですね。恥ずかしいとか、自信がなくて。でもやっぱり、その子のダンスをしたいという気持ちを大事にしたいということで、ちょうど若者事業が始まったタイミングで、隣に座っている三木をダンスの先生として呼んできて、ダンスを教えてもらいました。そしたらその子、どんどんどんどん自信をつけていったんです。詳細は三木から聞いてもらったらいいかなと思うんですが、大きな晴れ舞台というか、１年に１回、「豊中まつり」という豊中市民の一大イベントとなる大きいお祭りがありましてその子は、そのなかで舞台に立って踊れるようになりました。、当事者の人に、何か困ってませんか、何かやりたいことありませんかと聞きに行っても、その場で出てくることってすごく少ないんですよね。ですので、やっぱり日常のなかで、活動のなかで声をしっかりキャッチできるアンテナを私たち自身がどれだけ張っているかということが、その人たちの本当の気持ちとかをどんどん反映させていけるものにつながっていくのかなと思っています。

○三木：そうですね。さっきの、練習したのに踊れなかったという子のことはすごく印象的で、舞台袖で本当に体が固まっちゃって。押し問答で、「練習したやん(だからがんばって踊ろう)」と言ったんですけど、そのときに、「見られたくない」と言ったんですよ。見られるために、ステージに立ってダンスを見せるためにお化粧したり、髪の毛巻いたり、練習してきたのに、見られたくないって何やろうと思ったんですよね。それは、その子にとって居場所ってやっぱり本当に安心できる場所で、1週間に2時間だけ、この日のこの時間は、自分のことを思い切り話せる。でも、お祭りに来て、そこでダンスを披露するというのは、例えば学校の先生とか、学校の友達とか、安心できる場所でいる顔を、自分が社会に向けて見せることになる、そのときに、やっぱり心の準備がそこまでできてなかったということなのかなと思ったんですね。実はその子がダンス好き、やりたいって練習を始めた時、周りには同じ学年ぐらいの子で踊る子がいなくて、大人とめっちゃ一緒に練習してたんです。6人ぐらい。だから、その子が1人で前に立って、後ろでバックダンサー6人もいるやんと思ったんですけど、多分、大人のバックダンサー6人ってあまり役に立たないなと思ったんですよね。何か心強いと思ったり、頼もしい気持ちになるのは、大人が大丈夫だよとか、そういうふうに与える安心じゃなくて、仲間として一緒に活動したり、信頼できる人として一緒に舞台に立てる人がいる。この人がいるんだったら一緒にやれるかもというようなつながりがあのとき、つくれてなかったという反省があります。なのでダンスの活動のなかでは、自分の意思で決めて選ぶことであったり、仲間と一緒に参加をするということをすごく大事にしていました。

今日もテーマになっている言葉というところで、やっぱり言葉を獲得するというか、プロセスはすごく大事だなと思っていて。それは言語的なものだけじゃない、身体的なものもそうですし、時に言葉にできなかったものも大事にするのもやっぱりすごく必要なんだなと思っていました。ダンスの活動のなかでいうと、鏡で自分の姿を見られない子どもとかもいるわけですね。自分のボディーイメージとか、皆と肌の色が違うとか。でも、その子が鏡を見られないのは、その子自身が生まれてからずっと思ってきたわけではなくて、他者にまなざされることでつくってきた自分の1つの答えですよね。なのでそれを、例えば正しさを纏った、「個性は大事にすべきだよね！」のようなある種“いい多文化共生”でぶん殴るみたいなことできないわけですよ。そういう多文化共生の使い方はエンパワーメントに逆行するものだと思います。あるべき姿に向かってがんばれ、踏ん張れとかじゃなくて、日々の練習で鏡で自分の姿を見れなくても、ダンスがやりたいと思って、毎回遅れずに来るとか、きちんと準備をして来てくれるとか、そういうつかみ取った自分の意思や行動をまずは大事にするところが、エンパワーメントなのかなと思っています。

それができて初めて、じゃあ自分自身が今置かれている、例えば状況であったり、困難さというものを考えるというところにつないでいく。そして職員として関わって、こぼれ落ちそうだなと思ったときに、また新しい受け皿をつくっていくところにサイクルとしてはつながっていく部分もあるのかなと思っています。

○山根：当事者の声を拾うという話とは少し違った話になるかもしれないんですけれども、エンパワーメントって何だろうというのをすごく考えるわけですね。例えば、先ほどの話にあったように、鏡に映った自分を見られないと。でも、それはその子本人の課題ではなくて、そうさせている社会があるということなんだと

思うんです。私自身は外国にルーツを持つということに関しては当事者ではない。そんな当事者ではない自分をちょっと考えなきゃいけないなとか、そういう社会をつくり出している私たち、マジョリティの側はどうやって一緒に変わっていったらいいんだろうということを意識しながら普段仕事をしているわけですね。

そのなかでも１つご紹介したいのが、豊中のこれ、ちょっと特殊な事業なんですけれども、豊中市って今、全部で38の小学校があるんですけれども、その全ての小学校の3年生から6年生までを対象に「外国語体験」という授業をするんですね。豊中市教育委員会の委託事業なんですが、授業は英語ではなくてかまいません。いろんな外国語を、地域に住んでる外国人の人に来てもらって、その国の文化とか言葉を紹介してもらう事業なんです。3・4年生が昔は3時間で、5・6年生が2時間とかですが、全部の学校に、全学年に行くんですよ。すごい時間数になります。その千何百時間を我々がコーディネートして、地域に暮らしている外国人の人たちに行ってもらうんですけれども。

この活動に地域の、特に子育て中の外国人のお母さんたちに行ってもらうことが多いんですが、すごい効果があるんですね。いろんな思い入れがあるんですけど、例えば１つは、韓国のお母さんが教える側になって参加したことがあるんですね。日本人の男性との国際結婚で、子どもさんがいらっしゃる方なんですが、この外国語体験活動のボランティアしたいと国際交流センターに来られた当日に、すごいぼろ泣きして帰っていかれたんですよ。何かというと、韓国と日本とのいろんな政治的な問題があったりするなかで、「子どもに「何でお母さん韓国人なの？」と言われた。「何でお母さんオーストラリアとかの人じゃないの？」と言われたのがすごくつらくて、悲しくて…」というのを吐露しながら泣かれるわけですね。でも、そんな韓国のママが外国語体験のなかでいろんな学校に行って授業をしてくれました。本当は怖いんですよ。いわゆるニューカマーの人なんですけど、自分が韓国人であることも実は周りの人たちに隠していて、LINE とかメールも全部、ご自身の名前ではなくて夫の名前でやっているんですよ。自分が韓国人であることを出さずにずっと生活しながら、でも、韓国人の先生として、本名で自分の名前で行って授業をする。それを数年、ずっと続けていくなかで、何か自信がついてきたんでしょうね、今度はこのプログラムを回すコーディネーターとしていろんな人たちと関わって、同じような悩みを持つ外国人のママさんたちに、「あなただったら大丈夫、授業できるから」と励まして授業に送り出す役割をするようになりました。

そうして何かに頑張るお母さんを見るなかで、娘さんたちもすごく意識が変わってきています。去年は、そのお母さんに韓国のことを知ってもらう子ども向けのプログラムを 3 か月連続講座でやっていただいたんですが、その娘さんが手伝いに来てくれたんですよ。講座をした時、その娘さんがちょうど韓国に行っているタイミングたんですね。お母さんの地元に里帰りをしていて、講座の講師をしてくれているお母さんのスマホとその子のスマホを中継で結んで、皆に「アンニョン」とか言いながら紹介してもらうということを行いました。数年前は「何でお母さん韓国人なんだ」と泣いていた娘さんがです。お母さんが外国語体験活動のプログラムを通じて社会参加して、自分の国のことを誇らしげに授業する、そういう姿を見て、子ども自身がすごく変わっていくということがあったんです。そうやって、親が社会とつながって元気になっていく姿を見て、子どもたちも変わっていくんだなと感じます。このプログラムに参加したほかのお母さ

んたちのいろんな話を聞くと、ふだんは水商売やってて、夫にもばかにされたり、子どもにもばかにされたりするんだけど、学校の先生として行くことで、すごく見直された。子どもからも「ママすごいね。頑張ってるね」と言ってもらえるようになったというような話もよく聞きました。そうやって何か、子ども自身をエンパワーメントすることだけではなく、プラスアルファとしてというんでしょうか、やっぱり親自身もエンパワーメントされないと、なかなか子ども自身もエンパワーメントされないんだな、ということも感じたエピソードをお話しました。

○山野上：今、聞いていただいたエピソードは、どのようにすればその場が安心していられる場になるかということだと思います。なかなか、訴えとしても出てきにくい部分を、せめてつぶやきとして出してもらえるような場にしていくかということと、そこで出てきたものをどのように次のステップにつなげていくか。実際に一歩踏み出して外に行けたりだとか、つながっていくなかで、元気が生まれる。そして、一つ元気が生まれたらそこで終わりじゃなくて、さらなる元気が生まれるということで、どんどん動いていく、ぱたぱたと変わっていくという話だったのかなと思いますが。何かそういったエピソードって、もうちょっとありますか。

○三木：そうですね。さっきの韓国のママのエンパワーメントされたというお話を聞いて思ったんですけど、もちろん親と、それに子どもがエンパワーメントされる。欠かせないのは、社会がちょっとずつ意識の醸成をして変わっていくことだと思います。やっぱり近年の、例えばK-POPの人気が上がってきたり、韓国ドラマが人気になってきたり。そういうものの後押しって人権的な観点ではない、これは商業的な観点です。でも、そういうふうに社会の風向きが変わったのが追い風になっている部分って絶対あると思うんですよね。そういう意味では、取組だけではなく、追い風をどういうふうにつくるかというのも時に、市民と関わりを持つときは意識するようにしています。

　このスライドで言いますと、左下の「しょうないREK」と書いているところでESDとよなかというのは、国流の関係者だけではなく、いろんな、例えば福祉の分野であったり、地域というところでの関わりを持つ人が集まるネットワークみたいな形なんですね。なので、外国人について取組をするための会議とか集まりではないんですけれども。そういうところで外国人への関心が高まってきていたり、自分の地域のところにもいるよという声が上がってくることは結構増えているなと。人数が増えているのもあるんですけど、体感的なところでも増えているなと思っています。そういうところからさらに地域、市民というところに話を持っていくときに、情報提供とか案内もやっているんですけれども。そのなかで、私たちも市民の皆さんからお話聞きたいですよというのをどれぐらいオープンにするかも結構意識をするようにしていて。最近だったらメールにに来てましたね。私たちのセンターはエトレ豊中という駅ビルの6階に入ってるんですけれども、この間、「センターのビルの1階に外国人がいたと思うんだけど、私、すごい忙しくて、急いでて、声をかけられなかったの。でもいたの。」という連絡が来たんですね。「なので、ちょっと皆さん気にしといてください」というのがメールで送られてきて、そんなふうに届けられる声って今まで、私のなかではなかったんですよね。困っている人見つけましたとか、センターに行こうとして迷っている人を見つけ

ましたじゃなくて、あそこに外国の人いましたみたいな、ただそれだけなんですけれども、そういう声を届けようとしてくれるところでの、何か社会とか市民というなかでの意識の醸成はちょっとずつ高まってきてるし、追い風になっているからこそ、ある意味、それに乗っかっていろんなことをさらに進めたいなと思っているところです。

○山根：あと、地域とつながるときに意識したいなと思うのが、居場所ははたして国際交流センターだけでいいのかというところだと思うんですね。皆さん、最後のほうの迅野さんの円の中にあったと思うんですけど、国際交流センターは、外国人が生活しているエリアから結構遠いところにあったんですよね。じゃあより近い場所ってどこなんだろうみたいなこともやっぱり意識をしています。国際交流センターのある豊中市ってどんなところかご存じですか。豊中市は南北にめちゃくちゃ広いんですよ。センターは北部のほうにあるんですね。じゃあ日本語の勉強しにとか、わざわざセンターに来るかといったら、皆そうじゃないですね。アクセスがしにくかったりとか、経済的にやっぱり、電車賃 200 円なんだけど、払うのしんどいみたいな人たちもいるので、私たちがセンターにおいでおいでと言っていても、やっぱり来られない人たちがいるんです。

その人たちが、じゃあどこにいるんだろうみたいなことを考えて、例えば図書館を会場に、市内の 3 館の図書館で「おやこでにほんご」という外国人ママの居場所づくりをしているます。国際交流センターで外国人が来るのを待っているんじゃなくて、その人たちの近くに出かけていくのもすごく大事にしています。やっぱり図書館でやるのはすごく大きなことだなと思っています。図書館ってとても敷居が低い公共施設なんですよね。外国人の人たちに聞くと、市役所ってめっちゃ行きにくいと皆言うんですよ。市役所、できたら行きたくないみたいな。市役所はきちっとスーツを着てるキッチリかしこまった人たちばっかりで、行くとしたら何かの手続きしなくちゃいけないところなので、あまり皆足運びたがらないんですよ。さらに国際交流センターも遠い。そんなとき、図書館というのは、誰でもふらっと立ち寄ることができる場所なんです。そこで外国人ママの居場所づくりをやっている。この活動は、ボランティアも子育て中のお母さんに限定してるんですね、同じ立場の子育て中のお母さんが居場所をつくる。同じ立場の人がいるから行きやすい。そして図書館という誰もが立ち寄れる場で活動をやるから、外国人がより可視化されるんですよね。よく地域の人に、「うちのところ、外国人おらんよ」とか言われるんですけど、いやいや、いるんですよ。でもふだんの生活のなかで見えない。見えにくくなっている。そういう生活状況のなかで図書館に行くと、外国人ママの居場所があって、外国人の姿が見える。外国人の人たち、子育てしている人たちがこんなにいるんだって地域の人たちに見てもらえるのはすごく大事かなと思ってます。

外国人の近くに出向いていくということについては図書館もそうですし、日本語の活動のなかでもあります。日本語は国際交流センターでの活動が中心だったんですけど、日本語活動のボランティアさんから、「あそこの地域にも外国人いっぱいいる」って話が出てきました。センターへ来るのにバスで片道 30 分、運賃も片道二百数十円とかかかるような市北東部のエリアに、千里中央という大きな駅があるんですけど、「そっちのほうでも日本語の活動しなきゃいけないんじゃない？」とボランティアさんから言われるんで

すよ。「ああ、じゃあやりましょうか」と言って、新しく日本語の活動を千里地域で始めました。また南部地域、豊中の南部って結構しんどいエリアなんですが、そこには技能実習生をはじめ外国人のなかでもなかなか社会とつながりにくい人たちがたくさん暮らしているんです。ボランティアさんが「やっぱり南部もあったほうがいいんじゃない？」と言ってくれたのですが、それと同じようなタイミングで市からも「南部の方、ちょっとやってもらえませんか」と言われて、「じゃあやりましょうか」という話になり、南部で始めるみたいなことがあります。ボトムアップで地域のなかでどんどん居場所をつくっていくのがすごく大事だなと思いますし、センターだけを居場所にしちゃうと、「外国人のことは国際交流協会に任せてたらええやん」となってしまうんですね。でも、地域の課題なんですよ、外国人と一緒に暮らしていくって。だって、その人たち皆、その場で生活していますし、全ての外国人にとって国際交流センターが生活圏にあるわけではないので、それぞれの、皆さんが住んでいる中に居場所をどうつくっていくかということが大事なんです。そのためには私たち、国際交流協会の職員がいろんなボランティアさんとか、さっき言ったみたいに、「おったよ」と言ってくれるような地域の人とか、何か地域のなかで知り合いとか友だちをつくってもらうのがすごく大事なんじゃないかなと思っています。

神戸はどうなのかなとちょっと思いながら、こんな話をしています。

○三木：図書館の話で言うと、昨年度、市内の図書館の職員の方に向けてのレクチャーといいますか、コロナ禍で外国人はどんな影響を受けたかという調査をしたので、それの報告とともにミニレクチャーみたいな感じで行かせてもらいました。印象というか、私の感想としては、意外と皆、「どうしたらいいんだろう？」と戸惑うんだなと思ったんですよね。図書館に外国人が来たときに、「指さし会話帳を用意してますか？」とか、「展示の仕方をどうしますか？」といったことも、もちろんこれも大事なことではあるんですけれども、そういった具体的な提案に関する話よりも、もっと皆さんが頷いていた話があったんです。

それは、どんな話かと言いますと、あるベトナムの方がセンターに来たときのことです。その方は、自転車をなくされた、結局は撤去されていたんですけどね、自転車がなくなったということを一生懸命、ベトナム語で説明してくれました。当時いた職員は誰もベトナム語ができない。あたふたしたけれども、頑張ってやり取りをして、撤去されたことを、お金を払えばまた自転車が戻ってくることをちゃんと伝えることができたということがありました。そのエピソードを紹介しながら、言語だけが大事なわけじゃないですし、ちゃんと分かろうと思ってコミュニケーションを取ることがすごく大事なんですよという話をされたときに、一番うなずいていたんです。感想でも、そこに関するものが多くありました。やっぱり、直面したときに戸惑うのは誰しもあるかもしれないけれども、それでいい。頑張ればいい。だから頑張ろうみたいなところを、どういうふうに皆で総意として、まち全体として持つかみたいなと

ころが大事なんかなって思います。自分の普段いる領域とは違うところに出てお話をしたときに、初めてちょっと気がついたな、感じたなというところでした。

○山野上：補足をすると、そのときは、ベトナムの方が来られたときに、「そうだ、こういうときのためのポケトークだ」と言って、職員皆でポケトークを探したら見つからなかった。それでも何とかコミュニケーションを取ろうとしたら何とかなりましたということがありました。その話をしたら、図書館の方たちも「まず何か伝えようというところがあれば何とかなるのかもな」と思ってくれたという、そういう話だったんですね。

今、ちょっと話が広がりましたけれども。実際の、例えば国際交流協会とか、NPO とかでも、行政でもいいですけれども。こういった分野に関心を持っている人たちが集まって協働で進めている事業のなかで、多文化共生を大事にしましょう、丁寧に当事者の声を拾っていきましょう、つぶやきを大事にしましょうということを言えば、ある程度拾える部分があると思います。また、例えばセミナーをやったり、「こんな資料ありますよ」ということを伝えると、それを読んでくれる、分かってくれて、伝わる部分があると思います。

ですが、恐らく私たちが発信していくだけでは、地域の多文化共生を進めるところまでは切り込めないと感じています。先ほどの基調講演の話と重ねると、それぞれの人や機関や団体が、それぞれの場所から想像だったり、つながりだったり、連帯とか連携を広げていくという話が出ていたなかで、とよなか国際交流協会が一生懸命発信する、アウトリーチするだけでは限界があるのかなと思います。とよなか国際交流協会に関わってもらう、関心を持ってもらうことだけを考えていると、いつまで経ってもつながらない人たちがいる。声や情報が届かない人には、いつまでたっても届けられない。逆に、これまでとよなか国際交流協会の発信が届いていない人に対して、どう届けるかではなく、どこからなら届くのか、そこにとよなか国際交流協会の側がどう足を運ぶのか、そういう発想が必要なのかなと思っています。どう回路を開いていくかということが多分、次の課題なんだろうなと感じてます。

というわけで、今、アウトリーチということで、図書館とかのほかにも社会福祉協議会にも出向いていったりですとか、地域の集まりにも出向いていったりしていますが、その辺りについて、もうちょっとどのように広げていくか、つなげていくか、その際に感じている困難やクリアしようとしている課題などがあればお願いします。

○山根：地域のなかでと言うと、たまたまふらっとセンターに、外国人と交流したくてみたいな人が来られたケースがあります。うちの事業のなかで日常的に外国人の方と交流できるものって日本語の交流活動しかないんです。日本語の活動は年に１回の養成講座を受けていただかないとボランティアとして参加できない形にしているのですが、ちょうど、ボランティア養成講座が終わった後だったんですね。ですので、その方に今関わってもらえる活動がないなぁ･･･と思いつつも「ふだんは何されてるんですか」と聞いたら、「コーヒー屋をやってます。カフェやってます。」と。それでカフェの場所がセンターからちょうどバスで 20 分ぐらいの、少し距離が離れたところでした。またその場所が、さっきお話した千里中央というもう一個の拠

点ではないですけど、日本語の活動なんかをやっている場所からも絶妙に距離が離れたところだったんです。その場所をきいて、「これいいんじゃない？」と私、思ったんですね。この人とつながったら何か面白いことができるかもしれないと思って、その人に、「今すぐに参加してもらえることはないんですけど、そのカフェってイベントで使えますか？」と聞いてみました。そこから、そのカフェで出張講座みたいな感じで、外国人の方に料理のお話をしてもらって、その国にまつわるコーヒーを出していただくという企画を立てたりということもあったんです。何が言いたいかというと、結構、機会って多分いろんなところに転がっているんだなと思っています。防災とかもそうですけど、地域に出かけていって、外国人のうちのスタッフを連れていくと、「ああ、外国人おるんやな」みたいに気付いていただけたりとかもあるので。“国際”ということを大きく掲げてなくても、出かけていった先に、あ、これで何かできるんじゃない？と感じられる部分をどう意識して、キャッチして、次の企画に持っていけるかというところなのかなと思っています。

防災関係って割と最近、外国人のことを意識しやすい領域というのもあるんですけど。センターに消防署の方がいらっしゃったときのことです。「大阪って 2025 年、万博じゃないですか。インバウンドのこともあるから、何か防災やりたくて…」ととりあえず何か防災のことをやりたいと思っている消防の方が来られて。そこで、「いや、インバウンドもいいですけど、豊中ってそんなインバウンドを呼び込める観光資源も多くないのでインバウンドの外国人はそんなに多くないんじゃないかと思います。でも地域に住んでる外国人の方いっぱいいるんですよ」みたいな話をしたら、「あぁ、そうですよね」ってなったんですね。それで今度、再来週なんですけど、一緒にセミナーやりませんかということで消防署に外国人の人たちと一緒に行って、消火器の使い方を教えてもらう防災講座というのをやるんです。私は今、実務として子どもの居場所をつくってるとか、ボランティアさんとやり取りするような業務は担当していないんですが、こんな風に外からたまたま来た人とどうつながっていくのか、どんなことであれば、なんであればその人たちと一緒にできるのか、という新たなつながりづくりを考えて、そこを意識しながら仕事をしています。

○三木：本当に急な問いなので、難しいなと思いつつ。でも私の場合、今、総務なので、担当事業をがっつりやってるというよりは、少し俯瞰的にというか、客観的に見ながら進められている部分もあるかなと思っています。そこで言うと、これまでよりも職員になってからのほうがマジョリティの需要に直面するといいますか、時には手に取りたくないものありますけど。そういう自分が手にとりたくないものに直面したときの選択肢を、たくさん持っておくのはすごく大事だなというのが１つと。

私自身が当事者であるので、これは自分に対して言うことでもあるんですけど、「当事者だから分かる」とうぬぼれないことはすごく大事だと思っています。痛みを理解しようとしてしまうんですよね。まずは落ち着いて手に取って考えなきゃいけないのに、痛みに没入して感じてしまうことで支援ができなくなることが、これまでも何度かあって。そこはどういうふうに一旦切り分けて考えるかというのも大事にしなきゃなと思ってます。それでいくと、金迅野さんの講演のなかで出てきた需要を把握するというところで、私も需要の把握を間違えたなと思ったできごとがあって。市民との仕事をすることが多いので、そのなかでお知らせとか広報物つくるんですよね。そのなかで活動の紹介いっぱいしてあげよう、もっと知っても

らおうと思ってインタビューに回ったことがあるんです。それは、こちらの思いとしては、取り上げて、載せて、お知らせしようと思ったんですけど。そのインタビューのなかで、活動の中身じゃなくて、中国語を学ぶグループをされていた方にインタビューしたときだったんで、中国の方だったんですけど。すみません、普段すごい明るい彼女なんですけど、「皆さん、やっぱり中国のこと嫌いなんですか」と言われたんですよ。「学びに来られる方が減っているんですよね、やっぱりそうなのかなと思って。」と話されました。普段、すごく明るい彼女なので、そんな言葉が出てくると思っていなかったですし、自分は活動を面白いから取り上げてあげようと思っていた、その自分のおごりに気がついたときでもあって。正直そのとき、すごいうろたえたんですよね。距離を取ろうとして「私はそんなこと思ってないですよ」と言って距離を取ろうとしちゃったことがありました。でも、この言葉って、「私はそんなふうにしてません」という自分の加害性を免除するような言葉でもあるわけです。あれは本当に選んじゃいけなかったなと思って、すごく反省しました。自分の需要と相手のニーズがマッチしているかもそうですし、マイノリティとかマジョリティ、それぞれの需要と合っているかを小まめに確認するのは仕事のなかで大事にしておかないと、私の場合、自分の立場もあって、間違えてしまうな、気をつけなきゃいけないなということをいつも思っているところです。

○山根：今、ふと思い出したんですけど、地域とつながって何かやるときに、結構気をつけていることがあって、それは外国人を消費させないみたいなところかなと思っています。地域の方から、外国人の人に来てもらいたいとか、外国人のために何かやりたいみたいな感じで、ゲストティーチャーを呼んでほしいとか、こういう人探してるんだけど、来てほしいみたいな話があります。それはもちろん学校からもすごくよくあります。学校も国際理解の授業で、とりあえず中国の人に来てほしいとかあったときに、ゲストで来て、子どもたちはわっとその人の話を聞いて、そのとき楽しいってなるんですけど、それで終わっちゃうみたいなことがあります。学校に話をしに来たその人たちが実は地域に住んでいて、こんな困り事を抱えていて…みたいなところが全部ないものになってしまうこともあります。やっぱりそこでいいように使われない、みたいな。そこに行って、話を聞いてもらうことで、ただ楽しいなとか、ただいろんな国のことが分かって楽しかったなとかだけじゃなくて、地域にこういう人たちがこういう思いを持って暮らしているんだというところまで知ってもらうのもすごく大事にしたいと思っています。地域の人から何か声かけがあったときは、ちょっと斜めからというか、真正面からそのニーズを受け止めて、ニーズにマッチするよう対応するのではなくて、こうやって斜めから見ながら、あまりうまく使われないようにと思って対応しています。でも行ってもらう当事者の外国人の方にとっては楽しく、でも、ちゃんと消費されるだけで終わらないようなプログラムにしなきゃなということを結構意識しています。

○山野上：2 人の話を聞いて、情報をどう伝えるかだとか、実際にどうつながるかということで思い出したのが、この1年間ぐらいの国際交流協会の動きのなかで、すごく人が集まってて活発に動いているコミュニティのことです。それはネパールのコミュニティなんですね。そこがうまくいっているのは、1つにはキーパーソンになる人たちがいる。その人がやっぱり支援のマインドを持って、いろんな人たちを気にかけて、声

をかけて、積極的に足を運んで、あの人だったら、あの人が声かけてくれるんだったらということで人が集まっているということがあります。

もう一つ、やっていて面白いなと思うのは、キーパーソンがいるから人が集まるというだけでなく、そのコミュニティが何か集まりだとか企画をするときに、国際交流協会は「もうお任せ」という関係です。その人たち任せなんです。その人たちが、自分たちが必要な場、あるいは面白いと思う場、これをやりたいと思う場をつくる。それに必要な場所は提供しますよ、お金は出しますよ。うちらもせっかくだからちょっと関わりたい、やりたい的な感じで関わりはするんですけれども、国際交流協会が企画した去年のプログラム、どのプログラムよりも当事者の人たちが自分らで企画してやったほうが、この地域にこれだけたくさんのネパールの人たちがいたのかとびっくりするぐらい集まるんですね。そのときに、正直、企画の段取りとかについて言うと、行政の感覚的には、「あれ？大丈夫？」と思うこともあるんです。「これにこんな高いお金使ったのか」とか、「これはわざわざ海外から取り寄せなくても、近所のスーパーで売ってるん違うかな」ということがあったりします。イベントで挨拶してほしいと言われて、挨拶をしに行ったけど、30 分ぐらい始まらないとか。挙げ句の果てには一緒に踊りましょうと言われて踊って、いつ挨拶するのかなと思いながら踊り続けるみたいなことがあったりします。でも、自分たちでつくったものの方が皆さん本当に楽しそうでたくさん集まるんですね。それを考えると、どう届けるかとか伝えるかというよりかは、皆がつくって集まる場にどうやって関わらせてもらうかというように、ちょっと逆転の発想でやっていくのが、もしかしたら本当にいいのかなと思ってたりもします。実は、そういうときには市役所の保健所の方も、「そうやって集まるんだったら、結核のこともちょっとお伝えしたい」という話になり、踊りが始まる直前になぜか突然、結核のレクチャーが始まって、皆、ぽかんとして話を聞き、それが終わったら、「さあ、踊りましょう」みたいな感じになったりするんです。国際交流協会とか、行政が頑張って、どこまでできるか、それをとことん突き詰めてやるのも大事ですけれども、むしろ、いいようにどう使われるか、使ってもらうかということも、やっていかないといけないのかなとこの１年、感じているところです。

というところで、この１時間、こんな時間の使い方でよかったのかどうかというところが本当に不安ではあるんですけれども「話題は提供しました」というところで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

④ワークショップ「自分のことばをつくり、つながる」

加藤丈太郎氏にモデレーターとしてワークショップを構想いただいた。参加者は 6 つのグループに分かれた。各グループには「リソースパーソン」として前年度調査のインタビュイーが 1～2 名ずつ入った。各グループに行政・教育関係者、市民が入り対話できる場をつくれるように振り分けた。
ワークショップでは、まずリソースパーソンから、神戸市で暮らすことになった経緯、暮らしやすい/不便を感じるところ、神戸市にあったらよいと思う施策について聞いた。その後、「自分のことばをつくる」をテーマに「多文化共生」に向けて取り組もうと思ったことを個人ワークで考え、グループ内で共有し模造紙に表現した。その結果をグループごとに、模造紙の記録をもとにまとめる。

A グループ:ことばを変え、「巻き込」み「伝え合う」。
やさしい日本語を使うなどの言語面サポートでまずは「ことば」を乗り越える。その「ことば」を持って地域に出て個人とつながることで「聞く」を実現する。また、いろいろな立場の人を巻き込みながら、外国から来た方が参加したくなる場を設け「つながる」。さらに、今の取り組みの「見直し」と当事者意識をふくらます「共感」から、結果として、一方向ではない双方向のサポート、当事者と一緒に考える「巻き込む」状況をつくり、本当の意味での情報共有、地域と学校のコネクション、広報機能の強化などで「伝え合う」を実現したい。

B グループ:個人の学びを起点に相互理解を促進する。
わかったつもりにならない。教育することを諦めない。多文化共生に関する自主勉強などの学びから、需要の把握や外国ルーツの子どもの支援をするなど。個々の学びから活動を展開する。同時に、自分の思考や体験の言語化、発信する、気軽に話しかける、同年代で集まって多文化共生について話せる機会をつくる、外国人支援のためのアウトリーチの強化、人材育成など相互理解の促進につなげていく。

C グループ:現場主義、皆の力を信じる・まかせる、nothing about us with us。
一人を見つめる、かかわる。少しだけ踏み込む。それは、カテゴライズとインクルージョンを考え続けることにもなる。交流する場や機会を増やし身近な立場として共感する。自分だけがやるのではなく、ほかの人を信じて能動的に動くことが輪を広げることになる。

D グループ:子どもがルーツを大事にできる心をもてるよう居場所をつくる。
行政も一緒に地域に仲間をつくる。アンコンシャスバイアスに気付き取り除く。在日コリアンの歴史を記録として残し学ぶ機会をつくる。病院での対応。外国人がゲストではなく一住民として参加できるようにする。そうした周囲の環境のなか、母語母文化の継承活動を尊重し子どもがルーツを大事にできる心をもち安心でき

る支援をする。それはつながった人の状況を知る姿勢から実現できる。

E グループ:知る。つながる。組織での取り組み。
自分の思い込みや概念を見直し、傾聴することで理解しようとする。人の人生を知る。個々の実情を知る。そして、地域の人との接点をつくり、要望ではなく協働でのボトムアップで仕組みをつくる。だれ視点なのかを考えながら、とよなか国流のように支援サービスの提供について工夫していく。

F グループ:違いを楽しみながら、「どこから交わりあえるのか?」を考える。
違いは楽しいものである。一方で、「面白い」文化的取り組みをただ消費せずに深く長く関わる試みも重要である。地域を巻き込み生の声を聞くことで、違いを知り、どこでお互いが交わりあえるのかを考え続けることが一歩ではないか。

( 2 )2023 年度提言書「響き合う『多文化共生社会』に向けての提言」

「響き合う『多文化共生社会』」に向けての提言

①出会いとつながりの創出

地域においての「見知らぬ者」への視線、主として日本人住民から外国人ルーツ住民に向けられる視線には、知識がない故と誤った知識故による無理解や偏向がかかる場合が多く見られる。過去と現在の入国管理制度によって貫かれている外国人住民の位置づけが、パーマネントな隣人としての存在として規定されず、そのことがメディアや教育においても普及、拡散しており外国人住民をとりまく環境は、多くが在留資格に伴う限られたステークホルダー（同国者、雇用関係者や配偶者、学校関係者）との閉ざされた関係のなかで完結しがちである。

日本社会の少子高齢化に伴う世代構成の激変は、実質的な移民受け入れを加速化させ　ており、「外国人住民」の増加は、本事業の対象である神戸市だけでなく全国で顕著な状　況を生み出している。ただしかしその内実は、ただ増えているもしくは共存しているだけにとどまっている。

地域に住む外国ルーツ住民と日本人住民の出会う機会をつくることが重要である。当事者（外国ルーツ住民）との出会いがないために、当事者との距離がある、踏み込めない、カテゴライズしてしまい一人ひとりを見ていないなどの課題が生じる。現状を知るために地域に赴き、交じり合える点、接点をつくることで、身近なこととして考えられる、課題に共感できるなどが生じ、視線を変え、他者のルーツの尊重にもつながる。まずは、「多文化共生」施策推進者が、肩書にとらわれず、共生についての疑問や業務上の悩み、考えを外国人住民当事者も含めて共有する場が必要である。同年代で共生について話す、情報を伝えあう場をつくる、行政関係者も一員となり地域に仲間をつくるなど、人と人とが出会い話す場をもつことが求められている。出会いの場の創出の結果、ほかの市民も「巻き込む」、「つながる」が可能になる。

②理解を編む

使用言語や文化背景、当該地域で暮らすに至った歴史的経緯の異なる住民・市民が相互理解を深めるためには、まずは敷居の低い理解の糸口となる機会を設けることが肝要である。

理解のスタートは、「話を聞く」、「相手の立場で考える」、「歴史を踏まえる」、「当事者性」「一歩踏み出す」といった姿勢や主体性と「違いを楽しむ」「わかりやすい」「輪を広げる」といったように理解を広げる入口は、内容のポジティブさやハードルの低いものに当初ならざるをえないが、一方で理解の幅を広げるもしくは多層な理解を深めるために研究者や専門家・実践家による理解促進が提供される必要も高い。知る・学ぶなどの自主性を尊重した継続した学びを評価し続けられる仕組みが重要である。

またそれらを踏まえて「面白い」取り組み、面白いには易しいものも難しいものも含まれるが、他者の理解には「面白さ」があること、魅力あるものであることも伝えていくべきである。

「多文化共生」の前提として不可欠な理解には、いくつもの理解の糸が編み上げられるような仕組みが求められる。

③必要なことの共有

異なることが前提となる人々の共生には、いくつかの必須の課題があるが、イシューとして認識されている事柄が誰にとって必要とされているのかを再考することが重要である。

社会的立場の弱い外国ルーツ住民を管理、抑制するためだけの取り組みになっていないか、また従前から流布、定着してきた外国ルーツ住民へのステレオタイプ、偏見を助長するか強化するための取り組みになっていないかを人権尊重の視点から点検すべきである。

そのためにも母語を使える通訳や翻訳、やさしい日本語も使いニーズを外国ルーツ住民当事者から集約することが必要である。その上で共生するために必要な日本人住民への取り組み、外国ルーツ住民への取り組み、双方に必要な取り組みを共有できる仕組みづくりが求められる。

④取り組みの連関

多くの「多文化共生」施策が、情報認識の非対称性や実行組織のダイバーシティ環境不足などによって、双方向性や相互補完の欠如などの課題を持っている状況にある。

本来あるべき「多文化共生」施策は、一つの取り組みが別の取り組みを誘発し、また取り組み自体が孤立や隔絶といった殻や壁を破る開かれる機会に繋がるもの、連関するものである。

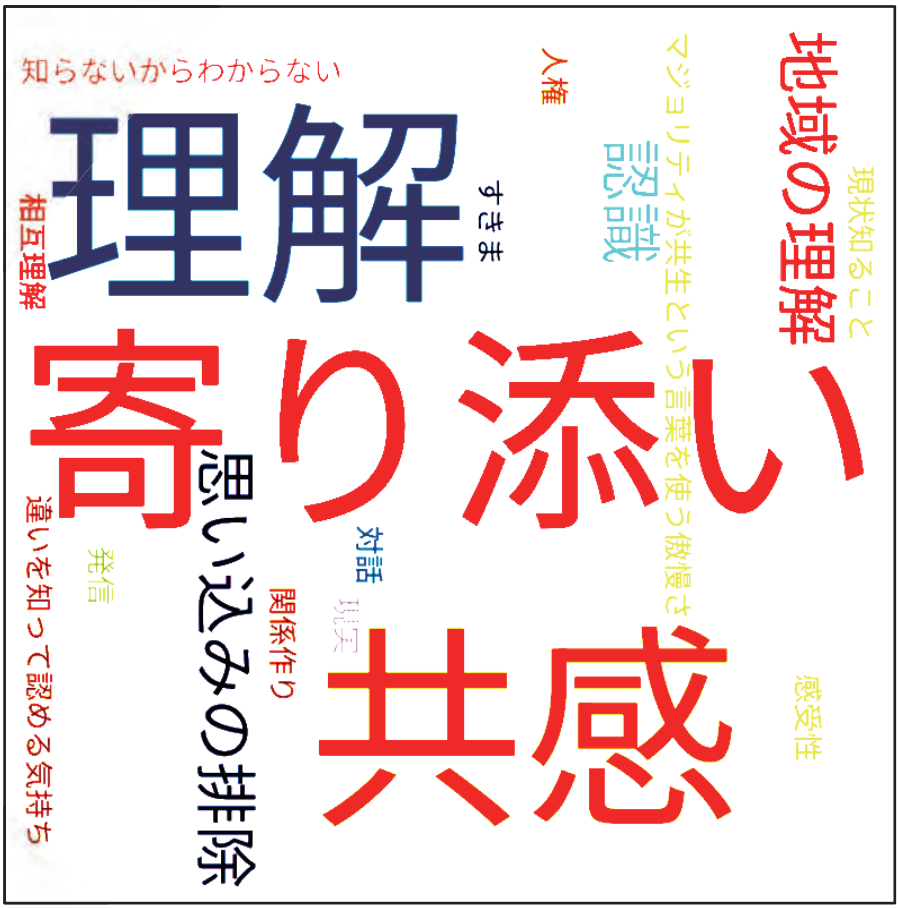
出会い、理解し必要なことを共有したうえでも取り組み、共生に向けての行動化は容易ではない。ステークホルダー各自が抱く課題感を解決するための行動に対し、動くことでしか得られない「学び」や「共感」は人々の絆を深める。連関する共生施策は、より推進者と外国ルーツ市民の思いが込められた、双方に尊重されるものになるだろう。

「ことばを紡ぐプロジェクト」報告
～共生社会のためのボーダーをこえる人づくりに向けて～

2025 年 3 月発行

作成　特定非営利活動法人神戸定住外国人支援センター(KFC)　金宣吉
〒653-0038　兵庫県神戸市長田区若松町 4-4-10
アスタクエスタ北棟 502
Phone 078-612-2402　Fax078-612-3052
E-mail kfc@social-b.net

本報告書は、公益財団法人笹川平和財団(SPF)からの委託業務報告書です。


現状知ること
地域の理解
マジョリティが共生という言葉を使う傲慢さ
認識
人権
知らないからわからない
理解
すきま
相互理解
寄り添い
共感
感受性
対話
現実
思い込みの排除
関係作り
発信
違いを知って認める気持ち